

# ま、金ならあるし

お買い物日記

岡田斗司夫

「そつだ、でっかくて薄さテレビを買おう」

そつといえば僕はもう売れない貧乏な物書きじゃないんだ。

ダイエットに成功したので書いた本がいきなりベストセラーになった。莫大な……とは言えないけどそれなりに多額の印税が転がり込んでくる。いままで欲しくても我慢していたアシャ「もしもどんどんどんを買っちゃえばいいじゃー」

しかし問題は、僕自身の「買ひ物力」の低さだ。子供の頃から後悔するものばかり買ってきた。買ったその瞬間、お釣りを貰う前にもう後悔している。そんな買ひ物根性無しがこの僕なのだ。

しかし！ そんな僕でもいまやベストセラー作家！

家電や日用雑貨でいざなら「オトナ買ひ」できるんじゃないの？ 悩むくらいだったら買えばいいじゃーん？  
だって、まあ、金ならあるんだし。

……というわけではじまったこの日記。基本コンセプトは、岡田斗司夫が印税を使い尽くすサマを連載する、という悪趣味なものだ。

第一回は「テレビ」。いま使っている三十二インチのブラウン管テレビは十五年前に買った重さ百キロ以上はあるシロモノ。ベストセラー作家なんだから、薄型液晶テレビ、買っちゃってもいいんじゃない？ さっそく吉祥寺のヨドバシカメラAVフロアへと向かった。

とりあえず、まず五十二インチを見せられる。悪くない。いや悪くないどころか素晴らしい。ちょっと押井監督の『イノセンス』がデモ画面に使われていたけど、圧倒的な美しさだ。

これでもいいかな？ と思ったけど、なんとなく気がなくなってしまった。あれ？ なんで大画面テレビのデモ映像って『世界不思議発見！』みたいな環境映像や映像美を誇る映画ばかりなんだろ？

「そついった映像の方が美しさわかりますから」とヨドバシの店員は教えてくれた。

いやいや、ちょっと待って。俺べつに毎日、映像美にひたりたいわけじゃないから。

ここから急転直下、店員と僕とのわけわかんない会話がスタートした。●○○○○●

テレビシリーズのガンダムで、毎回冒頭に「人類が宇宙に植民して半世紀〜」とかナレーション入るよね？あれは、アバン、正しくはアバンタイトルって言って、内容に入る前に「これまでのお話」とかを紹介する「コーナー」なわけだ。一ページの連載にアバンを入れてもしかたない。でもまだ連載二回目だから、いちおう「お約束」を説明させて欲しい。

この日記の基本コンセプトは、岡田斗司夫が印税を使い尽くすサマを連載する、という悪趣味なものだ。最初のお題は「テレビ」。吉祥寺のヨドバシAV館に薄型大型テレビを買いに行つて、店員に五十インチのやつを見せてもらったところまでで、前回は終わり。ここまでがアバン。次の行からが本編である！

「映像の美しさが違いますよー！」と力説する店員。しかし僕は懐疑的だ。「いや俺、ディスカバリーチャンネルとか見ないし。大自然の美しさにもあんまり興味ないんだよね」「今年は北京オリンピックですよ。スポーツはやっぱり大画面ですよ。映画だって迫力が違います！」「悪いけど、スポーツも見ないんだ。他人が身体動かしてるの見て楽しむ趣味はないから。映画も内容がわかっただけで充分だし」

いっしょにひるんだ店員は切り口をかえてきた。テレビを設置する部屋の大きさを聞いてきたのだ。つまり「部屋の大きさによって、おすすめのエイスがある」という理屈だ。

これも納得できない。テレビって予算や部屋のサイズが許す限り大きなものを買うべきなのか？そんなに大きなテレビ見たいか？ だいたい、僕がテレビで見たいのは大自然の驚異でも映像美でもない。『やりすぎクローザー』とか『さんま御殿』とかの世にもつまらないバラエティだ。つまりテレビを見るといふ行為は暇つぶしであつて、番組はさしすめ駄菓子、テレビ自体は駄菓子の入れ物なのである。駄菓子にそんなに金かけてどうする？

それに、もし映像美に興味があるんだつたら、でかいテレビ買つてる場合じゃないだろ。その前にレーシック手術したり精度の高いメガネやコンタクト買つたり、もっと根本の部分に金と手間をかけるべきじゃないの？……とまあ、大演説になつてしまった。思わぬ客の反論にフロア長まで登場して、大型テレビ否定論、まで行きそつになつてしまった。結果、僕は二十四インチという微妙なサイズのアクオスを買った。自分の信念通りの買い物、それもリーズナブルなサイズと価格を選んで満足である。

……さて、話わかる。この話とはまったく関係がないことは言つてもないので誤解のないように。今日の午後、僕はDVDで『スターウォーズ・帝国の逆襲』を見た。画面が、そつ、なんと言つたらいいのか、……迫力的なものが、ちよつと物足りないない、いささか残念的なカンジ……かもしれない？

あんまり大きな声では言いたかないけど、テレビは大きい方がいいかもよ。

事務所でテレビの取材を受けるとき、かならずお願いされるポーズがある。「じゃあ美少女のフィギュア、それもできるだけ大きいのを持ってきてお願いします」

愚かな。だいたい僕は美少女フィギュアなるものを一体も持っていない。

彼らが勝手に決めつけていた「画」が撮れないとわかると、次の質問はかならず「じゃあこの中で一番の『お宝』はどれでしょう？」  
「お宝」、つまり高価なものらしい。そう言われても困るなあ。

もちろん僕のコレクション、つまり『大阪万博やニューヨーク博覧会』、『昭和の宇宙開発』、『レトロなロケット』や『未来像』にもバカ高いものはある。オークションで競り落とすときに過熱しすぎ、乗用車一台分の金を突っ込んでしまった模型。SF文学の歴史に残る書籍で、ちょっとした不動産が買えるほどの稀覯書。どれもみんな、今よりずっとお金に不自由していた時代に無理して買ったものだ。

しかしそれは当時の僕にとって「買っしかない」ものであって、愛してやまない「お宝」かと言われても困ってしまう。

先日、僕は自分にとっての「お宝」を仕入れにでかけた。「立体造形者たちのフリーマーケット」でも紹介すればいいのかな？ ワンダーフェスティバル、略して「ワンフェス」は年に二回、東京ビッグサイトで開催される模型やフィギュア好きにとって最大のお祭りだ。ガレージキットと呼ばれる、「インディーズのプラモデル」が中心だけど、アンティーク玩具やコスプレや、メーカーの新製品発表などもある。

といっても参加するディーラーの八割までが美少女フィギュア、残り二割を怪獣やロボットなどの造形なのはイマドキのオタクニーズに合わせてるから仕方ない。

今回の買い物で、僕が一番気に入ったのは「犀」だ。動物の、あのサイ。でもまるで怪獣みたいでしょ？

ルネサンス期の画家アルブレヒト・デューラーの作品に、友達から聞いただけで見ただけでもないサイを想像だけで描いた木版画、というのがある。このミニチュアは、そういう「存在しないサイ」の立体化だ。

人間の想像力は、時に本物を超えた異形を生み出すことがある。そういう瞬間を立体化した、このような作品こそ僕にとっての「お宝」なのだ。

買った。

ついに『Air Mac』を買ってしまった。まさか自分がApple製品を再び買う日が来るとは。

嫌いなのかって？ 違う、その逆。好きすぎて憎くなってしまったのだよ。

思い起こせば一九八六年末、僕はたまたま秋葉原のショップで、Macプラスという最高に可愛くてカッコいいパソコンを見つけた。これなに？

マウスっていつの？ 動かしたとおりに画が描ける！ すげい!! これってまるで……そう、未来のパソコンだ！

大感動した僕は、たしか八十万円以上も払って小さな小さな、モノクロ画面のパソコンとバックパック型の容量四十メガのハードディスクを買った。総武線と中央線乗り継いで、持って帰ってきた段ボール箱を開けると、そこには本当に「未来」があった。

初期の『Mac Plus』ほど、箱を開けたときに衝撃を受けた商品をいまだに僕は知らない。本体・マウス・キーボード・マニュアル。すべて、そのパッケージのされ方まで完璧でオシャレで、取り出すのがもったいなくて、泣きそうに感動した。

それからはひたすら伝道師の日々。会社のデスクに据え付け、あきれ果てるアニメーターや取引先の人たちにひたすら、Macがいかに素晴らしいマシンなのか、その指し示す未来とビジョンと無限の可能性を暑苦しく説き続けた。『電脳なをさん』に登場する「ハナモチならないMacユーザー」とはまさに僕のことだったのだ。

毎週のように秋葉に通い、金の続く限りソフトや拡張キットを買う。しかしそんな蜜月も半年も持たなかった。『Mac II』や『SE』などという新機種が、高性能で安価な新型がどんどん登場した。最初は落ち込んだ僕も、性能アップという魅力には勝てなかった。『クアドラ840AV』、『パワーマック8100』と買い換え続けた。ついに二十周年記念モデルとして、いまでは「悪名高い」と言った方が通りがいい『スパルタカス』まで八十万以上する定価で買ってしまった。一年もしないうちにスパルタカスは二十万程度で叩き売りされ、僕のMac熱は冷めた。「もう二度と、裸足でパソコンをつくるリン」野郎の口車には乗らない」と堅く誓った。……はずだった。

それが今や、もう超がつくほどのバカMacユーザーだ。どこへ行くにもAir Macを持ち歩く。ラーメン屋で並んでいるときにも無線スポットを探して開くしまった。

バカだ。まさにMacバカ。そして人間とは、バカで愚かになり切れるほどに愛せるものを見つけたため、生きているのだ。少なくとも、次の安くして新しい新機種が出るまでは。

ガンダムが好きだ。

なにを今さらと思われるかもしれない。僕も今年で五十歳、論語によれば「四十にして迷わず。五十にして天命を知る」（四十而不惑。五十而知天命。）と言う。つまり「男というのは四十歳にもなったら心が揺るがなくなる。五十歳になったら自分の使命を自覚する」というわけだ。若い頃は軽薄にも新番組や新キャラに心がときめくかもしれない。でもオタクたるもの、四十歳を超えたらいちいち新しいガンダムなんて見なくてよらしい。五十歳になったら、自分とガンダムの関係を見つめ直さなければいけない。……と孔子様に説教されたような気がするので、富士急ハイランドまでガンダムを見に行ってきた。

若い頃は「テーマパークの入場料は高いし、吉祥寺から片道2時間半もかかるし」とか雑念が入って、ついアレコレ乗ろうとしてしまう。吉祥寺〜富士急ハイランドまでの電車賃が片道二千六十円、往復で四千三百二十円。入場料はフリーパスが四千八百円。園内で食事まですれば、かるく一万円を超える大イベントになる。「せっかく入場したんなら、もったいないからいっぱい乗らないと損」、そう考えるのも無理はない。FUJIYAMA A・ええじゃないか・ドドンパという絶叫コースターなど、誘惑も多い。

しかし「四十にして迷わず。五十にして天命を知る」だ。ま、金ならあるんだし、目的はただひとつ。『ガンダム・クライシス』というアトラクションだけ。

と快調にコラムは進むんだけど、ごろんの通りこのページにはガンダムの写真などゼロだ。いや、ちゃんと見てきましたよ。ガンダム・クライシス。実物大のガンダムは大迫力だったし、写真撮影禁止だったけど、それなりに満足した……気がする。

でも、僕の心を捕らえて離さなかったのは、乗り換えの高尾駅にあった天狗の顔（実物大）だ。天狗なんて迷信に実物大なんて」と笑ってはいけない。ガンダムだってしょせん空想の産物、妄想に貴賤なしだ。この天狗の顔、ガンダムとまったく同じサイズだ。戦ったらちょうど画になるサイズ。『ガンダム対天狗』！天狗が大団扇で突風を起こすと、アムロが「ジオンの気象兵器か？」と叫ぶとか。え？ ということは『ガンダム対奈良の大仏』もアリ？ ガンダム新三番勝負と考えると、ボス戦は『ガンダム対巨大観音さま』？

と、脳内が暴走してしまった僕は、肝心のガンダム・クライシスについてなにも覚えていない。ひたすらガンダム対天狗のことばかり考えた。まる一日と二万円、完全にムダにしたね。五十にもなって迷いまくり。お恥かしい。あと印象に残ったのは、おみやげコーナーで知ったゲゲゲの鬼太郎豆知識。鬼太郎は真空の宇宙空間でも平気。仙人のヒゲでつくった学生服。目玉親父の好物はサクランボ。とか知らなかったよ。

せつかくベストセラー作家になったんだから、ミシンを買おう。

毎日は使わないし、服を縫うわけじゃない。ただ単に趣味でミシン買っちゃおう。だってほら、ま、金ならあるんだし。

子供の頃から手芸が好きだった。姉の影響もあるし、家が内職の元締めをしていたのでフェルトなど用品がそろっていたのも原因かもしれない。気がつけば小学校の頃には人形の服ぐらいは手縫いでガシガシつくれるようになっていた。

しかし、プラモデルの魅力にはまってから、手芸の楽しさをすっかり忘れていた。

数年前、『岡田斗司夫のプチクリ学園』というCS番組に参加した。MONDO21で再放送してるから、見た人もいるだろう。『タオル君』というハンドパペットとゲストが会話するコーナーがあった。このタオル君、僕が縫ってつくったもので、操作も声も自分でやっている。ユニクロのタオルで作ったからタオル君。約三十五年ぶりの手縫い力作だ。

さて時は流れて二〇〇八年。僕は事務所の模様替えで悩んでいた。せつかく売れっ子になったんだから、事務所の家具はアフリックスとか北欧のデザインものでそろえようかな？ 江川達也みたいに「金ならあるぞ」的生活も楽しいんじゃない？

しかし、だ。どのメーカーの椅子も家具も気に入らない。超高級家具なんて、選んだ僕が消えて、払った値段しか話題にならない。そんな面白い物はバカみたいだ。

悩んだ僕が行き着いた結論は、自作、だった。いま使ってる椅子に手縫いのカバーをつける。もともとサイズや感触は気に入っていたクッションにもオリジナルのカバーを縫う。そのためには思い切ってミシン、買っちゃおう。

いや、正解だったね。「金ならあるんだ」と自分に勇気吹き込んで、足踏みスイッチ付きの二千円高いの選んだよ。みんなも覚えとくといいよ。ミシンは足踏みスイッチ付きを買え。もう便利さが違うから。一万九千円もするけれど。

おかげでいま事務所は、手作りのカバーや小物であふれそつになってる。なんだかオバチャン臭い気もするけど、笑いたい奴にはこつこつ言ってる。悔しかったらお前もミシン買ってみる！

## 『ムーンライナー』

人生で最大の買い物。それは財布の中身にかかわらず、いきなりやってくる。

十年前、僕はe-Bayという米国のオークションサイトにハマっていた。まだヤフオクなど存在しない時代。日本人で海外オークションにハマってる人などほとんどいなかった。僕は夢中でロケットや未来デザインなど、どんどん競り落とした。

当時、創刊されたばかりの週刊アスキーの連載ギャラをすべてはき出した。それでも足りずに貯金を使い果たすまで買いまくった。のちに荒俣宏氏に「岡田さんのおかげで国際価格が変わった」とほやかされたほどだ。

その時に僕は知った。金があるから、高い買いたい物をするんじゃない。運命のものを目にすると、欲しい、と思つ前に衝撃を受けて、払えるかな？と考える前に買ってしまふ。財布や通帳にその金額があるかどうかは考えない。

このムーンライナーというロケット模型は、僕にとってそんな運命の出会いだった。

ムーンライナーとは、初代ディズニールランドの人気アトラクションだった全長二十メートルのロケット機だ。一九五五年七月一七日、俳優で後の第四十代合衆国大統領となるロナルド・レーガンは、まさにこのロケット機の下から開園の実況レポートをした。そんな歴史的なアトラクションも、七〇年代の大改装で姿を消した。

八〇年代にロンドンの科学博物館で、『宇宙開発…その空想と現実』というブースが設けられ、そこでこのムーンライナーの模型が展示された。それが展示場の改装でオークションに出たのだ。

え？ うそ？ あのムーンライナーが？ そのムーンライナーのミュージアムモデルが売りに出てる？

オークション終了の一週間後まで、僕は毎日二十時間以上、パソコンの前を離れなかった。誰かが僕より高い価格をつけると、間髪入れずに指し返す。僕のハンドルもメアドも、当時の国際オークション市場では有名になりすぎて、単にいたすらで競りに参加する奴もいた。

でも僕は何も考えず、ひたすら競り上げつづけた。最初、大型テレビほどだった価格はじきに小型車程度になり、やがて外車も買えるほどの値段に跳ね上がった。

バカだ。本当に単なるバカだ。

でも、僕は後悔していない。自分が単なるバカに成り下がれるほど愛するものを見つけたこと。それこそが人生の目的じゃないのかな。



担当編集の嬢は、たぶん、僕に聞こえないところでの連載をボヤいている。

「岡田さん、金ならあるくせにセロイものしか買いませんね。どうせならくんだりなものに何百万も無駄遣いすればいいのに」いや申し訳ない。ベストセラーの印税など年末には間違いない無くなってしまうペースで使っている。しかしこの日記では取り上げるのに必苦しいほどくだらない使い方なので、顔はきれいだけど心は般若の嬢に気に入られるようなネタにはなりにくいのだ。

たとえば先週、またつまらないものを買ってしまった。『セレブ向けトイレットペーパー』だ。

吉祥寺の輸入雑貨店で、六本セットで二千円で売っていた。オレンジや赤など、あまりトイレっぽくない色がそろっている。

一本あたり三百三十三円。いつも近所のスーパーで買っている普通のロールは十二本セットで五百円。一本四十円だから、十倍近くの値段だ。なかなか人民元でお尻拭いてみたい気分になれそうである。

たしかにセレブ向けかもしれないけど、こんな下品なトイレットペーパー、誰が買うんだよ？

あ、俺だ。だってベストセラー書いたし。ほら、ま、金ならあるし。

で、意気揚々と最高に趣味の悪い真っ黒のロールを買って、自宅のトイレにセットした。

ところが、さすがセレブ向けすぎて香水の匂い強すぎ。トイレの外までタヒチの中途半端なリゾートの風呂場みたいな香りがあふれてくる。流そうとしたら、コシだ。なんか巨大な海苔みたいで気持ち悪い。

一枚五千円もするパンツだって買ったぞ。ワコールが開発した『はいて歩くだけでお尻が引き締まるパンツ』だ。あまりのバカ高さに感動して、東急デパートの店員が電卓叩いたときに並べて写真撮ったほどだ。

セレブ向けトイレットペーパーに超高級パンツ。ああ、なんて僕の下半身はセレブなんだろう。

……と頑張って書いてみたけど、もしかしたら担当の嬢に「フン」と鼻で笑われて終わりかもしれない……？

大阪・天満橋に『EXPOCAFE』がオープンした。名前がわかるとおり、ここは一九七〇年の大阪万博を追体験できるカフェだ。オーナーはこの業界では超有名な白井達郎さん。万博当時は高校生で、夏休み中に会場内の水中レストラン（！）でアルバイトをしながら、グッズを集めはじめた。

白井さんは大阪・池田市に個人で『万博ミュージアム』を開いている。自宅の一階をコレクションを公開するために予約制で開いているのだ。料金は無料で、入り口にはウルグアイ館の一部を移築している。

そんな白井さんが、ずいぶん以前から「万博カフェの準備をしている」と聞いて、ワクワクしていた。三年ぐらい前からカフェの専門学校にも通い、いろいろなカフェを見学していたらしい。

見たい！ というわけで、行ってしまった。新幹線でMacを開いて、いくつか仕事をキャンセルしたり謝ったり遅らせたりというメールを送りながら、心はずでに大阪万博だった。

……と、まあここまでなら、良かったんだよね。新幹線往復とホテル代程度だから。ま、金ならあるし。

京阪・天満橋駅から歩いて五分。びっくりするぐらい普通の場所に、すっごくカッコいい大窓があった。ロケットの窓！ ショーウィンドーに並んでるお宝グッズに目を奪われる。え、これ売ってるの？ 安い！ 僕が知ってる相場の半額以下だよー

いやまあ、買いましたよ。エキスポマークのお盆とか、岡本太郎の顔、シリーズレリーフとか。もう普通の人がみたら、なんであるオッサンそんなに興奮してるんだろう、というキョイで。もちろん大散財でしたよ。とほほ。

でも、お店自身はすっごくオシャレなんだよね。基本色をオレンジと白にしたのも大正解。高度成長時代というのは「プラスチックが世界を変える」といわれた時代で、あの人工っぽい発色が、未来を感じさせてくれたんだもんなあ。

これから白井さんは、どんどんお店オリジナルの商品を発表していくらしい。猛烈にうらやましくなった僕も、この連載オリジナルのアイテムをつくることに決めた。完成したら読者にプレゼントしちゃおうから、お楽しみに。

僕がわかるお寿司は一人前八千円までだ。

『銀座久兵衛』という寿司屋がある。北大路魯山人や志賀直哉などが愛した名店なんだけど、このランチタイム握りが八千円だ。ま、金ならあるから、サクッと食べにきたわけだ。それでもランチタイムのサービス握りにしか行けないんだから、自分のセコさがイヤになる。

お寿司はたしかに美味しい。寿司飯に砂糖を使わないそうだけど、後味もさっぱりしていて、まことに結構。

でも、でもである。「四千円の寿司の二倍、美味しいか?」と聞かれたら困ってしまう。「二千円の寿司の四倍、美味しいか?」「千円の寿司の八倍、美味しいか?」

うーん、あくまで私見なんだけど、美味しさと値段の関係は「値段が倍になっても、味は倍にならない」のじゃないだろうか?

二千円の寿司は、千円の寿司より一・七倍くらいは美味しい気がする。

四千円の寿司は、二千円の寿司より一・五倍は美味しい気がする。

そして八千円の寿司は、四千円の一・三倍くらいは美味しい気がするのだ。

この減衰率から考えると、おそらく五万円の寿司というのは、八千円の寿司の二・二五倍程度の美味しさという計算が成り立つ。

もちろん、美味しさというのは食べる側の感受性、つまり「絶対舌感」の能力によって変わってくる。僕のように貧乏な舌しか持っていないければ、超高級寿司は食べても無駄なんだろう。高級な「絶対舌感」を持つ人にとっては、五万円の寿司やキャビアやファグラは「値段相応の価値を持つ」に違いない。

しかし、である。マンガやアニメなどの完全嗜好品を扱ってるかわかるんだけど、「万人が認める価値」というのは幻想でしかない。予算やスタッフが豪華なアニメが面白くとは限らなう。

となると、超高級な寿司、というのは、「あなたにとっての超高級な味」を約束するのではなく、「客観的に見て超高級な食材を、時給単価の高い職人が握っている」という意味なんだろうか?

考えながら食べていたら、あつというまに八千円のランチ握りは完食していた。しまった。せっかく八千円もするのに、味わいそこねた!

お勘定しながら、ひとつだけわかったことがある。八千円の寿司は、千円の寿司の八倍美味しいとはかぎらない。でも財布の痛みは、確実に八倍味わえる。

論理的な考え方や行動が大好きだ。

論理的なことが、正しい、じゃなくて、単に、好き。だから、意味なく理屈っぽく考えてしまう。行動が論理で美しく説明できている時は、自信满满になれる。スタイリッシュでカッコイイと、我ながらほれほれする。逆に、理屈では説明できないうけど、いい、みたいな行動をとってしまうと、ブルーになる。自分がイヤになる。

論理的は、生活のあらゆる面で、僕が目指しているんだ。

たとえば、映画鑑賞。

映画くらい好きに見ればいいじゃないか、と考える人も多いだろう。違う。僕は自分なりの、論理的な、映画鑑賞法を確立している。

僕は最初の十五分で、その映画を最後まで見るべきかを見極める。面白ければいいが、ダメなら席を立つ。そのまま外に出てしまうのだ。

映画の料金もつたいたい？ とんでもない。

論理的に考えたら、これほど効率を重んじる方法はほかにない。映画館に払う料金は通常千八百円。これは入場の時に取られる金額で、泣いても笑っても、絶対に帰ってこない。つまり、千八百円という投資は妥当であるかどうか、を判断する折り返し点は、映画館に入った時点でもう過ぎてしまっている。

その  
11  
次の判断ポイントは、二時間という時間を投資するかどうかだ。最初の十五分は判断のための投資。「さらに一時間四十五分を投資すべきか？」と考えるわけだ。

大半の映画が、再投資に値しない。具体名を出すのはちょっとアシなんだけど、邦画超大作とか有名魔法学校ものとか、だいたい映画は最初の十五分しか見ていない。

これを「十五分しか見てないのに千八百円支払うなんてもったいなさ」と考えてはいけない。

「千八百円+十五分という投資だけで切り抜かれてラッキーだった。あやうく一時間四五分も無駄にするところだった」と考えるべきなのだ。

お金は稼げばいいけど、時間は取り返せない。見よ、この伶俐なまでの論理の冴え。論理より感情を重んじる人には、絶対にできない技である。

……しかし、だ。せっかくなら自分で判断して見るのを中断した映画なのに、何年も気にかかってしまう。「最初の十五分しか見てないけど、続きはどうだったんだらうか?」「あと三分で劇的に面白くなったかもこれなのさ」「我慢できず、DVDをレンタルして見てしまう場合も多い。」

映画代千八百円+お試し十五分+数年間ヤキモキ+レンタル代三百八十円+鑑賞時間一時間=プライスレス

わかっている。論理とはダンディズムだ。損得じゃない。美学なんだ。

ほら、ま、お金ならあるし。悔しくない。泣いてなんかいないんだってばー!

「最近、オシャレになりましたね？」とよく言われる。

痩せたからオシャレになったわけではない。デブ時代の服がすべて着られなくなったから全部買い直したのだ。

普通サイズの服は、驚くほど安い。ユニクロや西友に行くと千円台で、そこそこ着れる服がいくらでもある。ユニクロはいいよね。安くてもデザインはいいし。それに痩せたらサイズがジャストフィット。太っていた時代はなにを着てもどこかダブダブだったりキツキツだったりしたもんだ。

結果、今までよりオシャレになったように見えるのだらう。

オシャレになったと思われた僕が、次に訊かれるのは、「好きなブランドは？」だ。

バカにしてもらっては困る。服のブランドなど興味がないしわからない。服にお金をかけた性分というわけじゃないし。

いやなによりも、服などどれも同じに見える。

モビルスーツの違いにはうるさいが、Yシャツの襟が丸かろうが四角かろうが、ネクタイが太かろうが細かろうが、大してかわらないと思ってしまふ。

とは言え、着るものにこだわりがないわけではない。デブ時代から僕は、ヘンなTシャツが好きだった。当たり前だが、これなら、さすがの僕も同じには見えない。

「典型的に○○○○の感じが似合いますよね」「服に負けないですよ」「と○○○○め言葉に気をよへて、何か○○○○と買いました。その結果が、この○○○○クシヨんだ。

しかし、考えてみると、こんなヘンテコなTシャツを、似合う○○○○とか、着こなしている○○○○と言われるのは絶対に誉め言葉じゃない。

なにを着ても似合わない○○○○ヘンなTシャツなら柄に目がいくからいいじゃない？○○○○という意味ではないか？

ああ、そんな単純な事実に気づかず、○○○○したくらい僕もヘンテコTシャツに○○○○込んだら○○○○

ま、金ならあるし、わざわざ恥を買っていたようもなかったよね。とほほ。

『ファイトだ！ピュー太』のDVDボックスを買った。一九六五年、僕が七歳の頃に放映されたアニメだ。アニメ史の資料をひもとくと、日本のギャグアニメの草分け的存在などと評価されている。だからと言って、DVDボックスを買うほどのものか、という気持ちもあった。が、なにしろ七歳の頃だ。どの話数がおもしろかったのか、覚えていないはずもない。だから、何巻だけ買おうと決められない。全部買おうしかないのだ。まあ、金ならあるし。買ったからには見るしかない。ディスク五枚組のボックスを見はじめた。

オープニングは記憶通り、スピード感抜群で最高だ。第一話も、設定の紹介だからこれまた面白い。しかし、そこから先、なかなか面白くならない。ちょっと待て。僕はこのいつ面白くなるのかわからないアニメを延々最後まで見るしかないのか？

飛ばし飛ばし見てみる？ いや、たまたま面白い話数だけ飛ばしてしまつ危険もある

そもそも、当時七歳の子供が面白かっただけで、いま見たらさっぱりということだつて、大いにありうる。どうする？ せっかく全巻セットを買ったんだから、見ないともつたいない。でも面白くないアニメを見るのは、時間をもつたいない。なんだかわかんなくなってきた。みんな、このシレンマをどう乗り切ってるんだらうか？ 例えば僕は『ブリードランナー』が好きだ。だからビデオもレーザーディスクもDVDも買った。

好きな作品を手元に持っておきたい。これは、当たり前前の感情の気がする。

でも冷静に考えれば、しょせん一度見た作品なのだ。二度目が、一度目ほどおもしろいはずもない。映画館より高いお金を払って買う値打ちが、本当にあるのだから？

DVDを持っていれば、たしかに何度でも見られる。でも三度目、四度目になれば、面白さや感動は初回よりもどんどん目減りする。自分の感動を目減りさせるために、僕たちはあの高いDVDを買ったりしてゐるんだらうか？

だからと言って、見たこともない作品をDVDで買うのは危険すぎる。同様に、むか～し見て面白かった作品を買うのも、どうもあやしい。そんなあやしいものに、何千田何万田も使つのは、金の使い方としてバカみたいな気がする。

しかも、だ。DVDを買ったら今度は、見るための時間、をつくらなくてはいけない。これは、買う金を工面するのと同様に、いや時にはそれ以上で難しい。

知り合いの漫画家で、映画が好きなヤツがいる。当然、好きな映画のLDやDVDを山ほど持っている。が、それらの作品を映像特典まで含めて全部見ようとする、彼の残り寿命よりはるかに時間がかかると言つ。自分の寿命よりも、見るべき作品の長さが多い人生！ 彼は本当に幸せなんだらうか？

その点、古書マニアたちは達観してゐる。「本は、買うもの。読むものじゃない」と言い切る人も多い。そういう考えの方が、心の平穩が保てるのかも知れない。

どいつも僕には、なにか、が欠けているらしい。

常識？ センス？ 空気を読む力？

はつきりとはわからない。でもなにか欠けていることだけは間違いない。

普段は大丈夫なのだ。テレビを見ていても、お笑いが好きとかスポーツが嫌いとか、偏りはある。でも普通の日本人の範疇だと思う。ところが、これはイケる！、流行る！、という感覚がどうもおかしらしい。

先日、僕はネットニュースで『ヌーブレラ』という商品を買った。別名、二十一世紀の傘、だ。

手をつかなくていい傘！、というのが売り文句らしい。ほお、便利そうじゃん。二十一世紀と謳っただけはあるよな。

僕は、歩きながら本を読む。歩きながら、ケータイメールをつつ。何より手ぶらが一番好きなのだ。

ヌーブレラは手で持つ必要はなく、両肩に固定する方式だ。全体が半球形の透明ドームになっている。頭だけでなく、背中や胸まですっぽり覆うので、上半身が濡れる心配がない。この透明ドーム中なら、本を持つとつが携帯をいじることが大丈夫だ。

さすが二十一世紀。こんな傘みんな待っていたはず。たぶん三カ月後には日本でも本格的に発売されて、そこら中にヌーブレラがあふれるに違いない。

……と、その時の僕は考えてしまった。

日本では販売されていないけど、ネットで申し込めばいいのだ。ひと足はやく流行を先取りしたいので、航空便を指定。送料が割高なのはしょうがないよね。まあ、金ならあるし。

楽しみに待つこと、数週間。たまたまつけていたテレビのワイドショーで、ヌーブレラが紹介されているのを見た。問題は、その扱われ方だ。

「こんなおもしろい傘がアメリカでは発売されたようです」という紹介に「うわ、バカ！」「こんなの、誰が使つの!?」と、「メンテーター全員が大爆笑。完全に、お笑いネタなのだ。

ショックだった。ショックの理由は、ワイドショーでも実物はなく、僕と同じ写真を見て、大笑いしている点だ。

僕はヌーブレラを「カッコいい！ 絶対に流行る！」と確信した。でもテレビの人たちは僕と同じ資料、同じ写真を見て、「アメリカ人ってバカだね」「こんなの買つ日本人、いませんよ！」とツッコミまで入れている。

すいません、ここにいますけど。

茫然と立ちすくんでいると、ピンポンとインターホンの音がした。二十一世紀の傘、ヌーブレラ、がいままさに、届いたのだ。

実物のヌーブレラは、さらに僕をどんよりさせた。

まず、すごくかさばる。折りたたみ式ベビーカーくらいある。しかも重い。

広げるのも畳むのも面倒。きれいにたたんで専用ケースにいれないと持ち歩けない。

装着して歩く姿は、まるで巨大なマッチ棒みたいだ。とてつもなく目立ってしまつ。絶対に指さされて笑われる。

なにより問題は、たとえば近所の屋根付きアーケード商店街に入る時だ。マニュアルにはそついう場合、透明ドームの前面だけ開けると書いてある。無理だ。単なる罰ゲームである。

わざわざ梅雨に間に合わせようと航空便で取り寄せたヌーブレラ。とうとう梅雨も終わって暑い夏が来たけど、当然ながらけっきょくまだ一度も使っていない。

一体、僕には何が欠けているのだろうか？常識？センス？  
何が欠けているかわからないけど、変な傘があるのだけは、はっきりしてる。



タクシーに乗るのは特別な時だ。

終電がなくなつた。初めて行く場所で、バスの乗り継ぎがわからない。荷物がものすごく重い。すごく急いでいるが、電車だと遠回りになる。雨がどしゃぶりだけど、濡れるとまずいものを持つている……などなど。僕はそれ思っているし、すごく普通の感覚だと思つた。

だからこれまで移動は電車ばかりだった。TV局や出版社との打ち合わせで「自家用車でどうしようもしますか？」タクシーですか？と聞かれ「電車で行きます」というと、びっくりされる。

「ぶくん、業界人って贅沢病が多いんだな」と思ったりもした。

ところが最近、それも言つていられなくなつたのだ。電車の中で、いきなり知らない人に写メを撮られたりする。

あの痩せた人とか、五十キロ減つた、メモ帳の、スポンひっぱってる人とかいうひそひそ話も、漏れ聞かされてくる。

夜遅くなると、酔っぱらいに絡まれたりする。ストーカーっぽい人につきまとわれることも少なくない。電車の中だと逃げも隠れもできない。サファリパークの動物状態だ。

「あ、テレビに顔を出していると電車に乗ることができなくなるんだ。そりゃ自家用車やタクシーが必要になるはずだ」  
やっと僕にも理解できた。

というわけで、吉祥寺の事務所から渋谷のNHKまでタクシーに乗ってみた。まだ電車は動いている時間だ。京王井の頭線なら二百十円だけど、タクシーなら四千円べらういかる。

わずか三十分程度の不快さを避けるために三千八百円……いや、悩んだこと悩んだこと。

まてまて。いまや僕もベストセラー作家の端くれ。四千円で、そこまで悩むか？

と自分を納得させて乗ったタクシーだけど、これがなんとも落ち着かない。

まず電車と違って、到着時間が読めない。早く着くこともあるが、渋滞だと信じられないほど時間がかかることもある。当然、余裕を見て早めに出かけることになる。そのため、目的地に到着してから、時間が中途半端に余るんだけど、これがどうしても許せない。

普段、電車の乗り継ぎ時間に余裕をみすぎて、楽屋に十分早く着いてしまっただけでも、猛後悔する。そこまでセツカチな性格の僕である。それなのに、タクシーで行くと三十分も早く着いてしまった。「ああ、この三十分でメール五本は処理できたのに……」と胃がキリキリする。

しかも、タクシーは夜、本が読めない。移動中の読書は、僕の人生に不可欠なもの。

もちろん、タクシーの中には、読書灯がついているものもある。が、どのタクシーについているかまでわからない。わざわざ手をあげて止めたのに、読書灯がないからと断るわけにもいかない。

読書灯がない場合、無理して街灯りで本を読むことになる。灯りが車窓から入れば、素早く「二行読む。暗くなったら、次に明るくなるまでページを開いたまま、さっきまで読んでいたあたりをまんじりともせせむらむ。明るくなったらすすり読むのみにした。だ。

あたりまえだけどこれ、異常に疲れる。

これなら、危険や不快を覚悟で、堂々と電車に乗って本を読んだ方が気が楽かもしれない。三十分と三千八百円、節約できるしね。

「大型の液晶テレビを買うより、レーシック手術を」というのが持論だ。

映像マニアは画質にこだわる。プラズマと液晶の発色の違いについて解説する。やはり二一のトリニトロンじゃないと信用できない、とのたまう。しかし、同じ映像マニアでも、僕の考えは違う。大型テレビに五十万円も使うくらいなら、近視手術（レーシック手術）をした方が安上がりだ。よほどクリアで美しい画面が見えるはず。

それが僕の持論だった。自分なりに理屈も通ってると思う。なので昨年、ベストセラーを出した時も、大型テレビは買わなかった。

よし、レーシック手術でもするか。

迷わず、そう決心できたのだ。

映像マニアとして気になっていたのが視力の低下だ。三十代後半までは〇・八程度は見えていたはずだ。しかし気がつくと、駅の案内板まで見えにくくなっていく。

眼鏡をつくろうと検査したら、いつの間にか視力は〇・二まで下がっていた。おまけに乱視が進行していて、どんなに近くで見ても焦点が完全には合わない。しかたなく眼鏡をつくったけど、困ったことに僕がこの眼鏡というやつが大嫌いなのだ。

眼鏡をかけるくらいなら、というわけでレーシック手術を受けてきた。

結果といえば、半分は大成功。テレビや映画はとにかく爆発的に見える。〇・二程度だった視力が、一・五まであがったのだ。普段、何気なく見る風景が、いきなりハイビジョンになった。やはりテレビを買い替えるよりレーシックの方が、効果大だ。

しかし、大成功！と声を大にして言えないのは、僕の年齢のせいだ。

中年過ぎからレーシック手術をすると、急激に老眼がすすむ。僕は手術後、九十センチより手前のものがぼやけて見えなくなった。

手の届く範囲にあるものは、すべてぼんやりして、何ひとつはっきり見えないう。今までの癖で、見えないうつら、近づいて見ようとするとますます見えなくなる。

不思議だ。まるでミダス王になった気分だ。

ギリシヤ神話に登場するミダス王は、手に触れるものすべてが金に変わるようにと神に願った。しかし結果、食べ物や愛する娘に触れると黄金に変わってしまった。

そんな悲劇の主人公ミダス王。まるで視力が上がることを願って手術して、結果、手に触れるものすべてがぼやけてしまう僕のような気が。

ああ、なんてかわいそうな僕。悲劇に酔っていると医者はいった。

「六カ月して術後が安定したら、左目を遠近両用に再手術します」

「え？ じゃあそしたら近くも見えるんですか？」

「もうバッチリですよ」

「じゃあそれまではどうすれば？」

「老眼鏡をかけてください」

あれほど嫌って、眼鏡をかけるへんがいらないうレーシック手術してやる！と思っていた眼鏡。その眼鏡がいまや、手放せない必需品になってしまった

のだ。

半年後には再手術して眼鏡から解放されるという。それまでの我慢だと思えばいいんだけど、ひよっとしたら大型テレビを買った方が良かったんじゃないかな？ とか思わないこともないこともない。

ああ、人生って難しい。そうですね、ミダス王さま。

ミダス王は、もう一度神に祈り、川で行水することで、その能力を洗い清めるのだが、僕の場合、今度は遠視の手術を受けることで、よりヴァーシオンアップできる予定だ。

半年後に利き目とは逆の目を手術し、遠近両用にするのだ。

それまでは、ミダス王の気分を味わうしかない。

ただし、僕には老眼鏡という強い味方があるので、大丈夫だ。

ミダス王も、金にかえる能力を断絶させる手袋とかあったらよかったのね。

何かを心から愛するというのは、まことに難儀なことでもある。

好きで好きでたまらない。そういう気持ちは、人をして「何か」をせすにはいられない気分にする。まず最初にやってみるのは「買う」という行為だ。

たとえば、ヨン様が好きで好きでたまらない。その気持ちは、ヨン様グッズを買いあさらせる。ヨン様のマグカップ。ヨン様のカバンペンケース……。オバサマたちはもちろんいい年してるんだから、いまさらマグカップやタオルやカバンペンケースが欲しいわけではない。でもヨン様が好きで好きでしかたない。その気持ちのもっていき場がないから、しかたなくグッズを買っわけだ。

アニメキャラが好きで好きで仕方がない中学生は、声優のコンサートに行ってヲタ芸ではじけたり、海洋堂から出ているフィギュアを買ったりする。声優もフィギュアも、そのキャラクターとイコールじゃないことくらい十分わかっているんだけどね。

「好き」という気持ちは、お金を使っただけじゃおさまらなくなっていく。阪神タイガースが好きで好きでたまらない大阪のおっちゃん、負けたと言って居酒屋でクダをき、勝ったと言って道頓堀に飛び込む。迷惑きわまらない。

自分の「好き」という気持ちのもっていき場に困っているのは、オタクもタイガースファンも、ヨンさまファンも同じなのだ。僕の場合、あまりにも何かを好きになると、「と」いうわけか立体物をつくりたくなる。

吉田戦車の『殴るぞ』というマンガに登場する犬が、好きで好きでたまらない。その犬が、自分の主人に「自分は実は犬型のロボットで、中には猫が入って操縦している」という設定の断面図を見せるシーンがある。エイプリルフールのジョークという設定なのだが、このイラストが可愛い。

で、最初はこの「オレの秘密」断面図のＴシャツを買ってみた。まあ三千円ぐらゐの金ならあるし、Ｔシャツ一枚で僕の「心のもっていき場」が収まるなら安いものだ。

が、Ｔシャツを買うだけでは、何か物足りない。他にも買おうかと思ったが、メジャーなキャラじゃないので、グッズなんか売ってない。それに、何を買っても僕の心は満たされない気がする。

こういうときは、何かをつくるに限る。とりあえず、犬のクッキーを焼いてみた。

我ながらいい出来だ。似ているし可愛い。かなり嬉しい。しかし、こんなクッキーを焼いたばかりに、ますます気持ちはエスカレートしてしまった。続いて、フィギュアをフルスクラッチすることにした。オレの秘密断面図に忠実な、断面模型だ。

一カ月以上、いろんな仕事の手を抜いたりＴＶ出演を断ったりしてまで、つくり上げた。我ながら会心の出来映えである。しかし、この犬が好きという心は、ますます燃え上ってしまった。

なにかを本当に愛する、という気持ちは難儀なものである。なにを買っても、お金や手間や真心をどんなに注ぎ込んでも、底知れず吸い取られていく。若者よ、気をつけた方がいい。お金がいくらあろうと、愛があれば人間は幸せにはなれないのだ。

数年前、後に業界で「食玩バブル」と呼ばれる時代があった。食玩とは、ちょっとしたお菓子に、フィギュアのおまけをつけた商品のことだ。フルタ製菓のチョコエッグシリーズなど、ご記憶の方も多いと思う。

百五十円〜三百円という気軽に買える値段、大々的なコンビニ販売、大人も驚かせる精密さ。そして何より、どのフィギュアが入っているか見えないういキャンブルとしての楽しさ。

ニユースでも大々的に取り上げられる一大ブームとなり、コンビニやスーパーの一番目立つ棚がまるまる食玩に占領されたあの頃、チョコエッグシリーズは累計数千万個の怪物商品にまで成長した。

つくる側もノリノリで、とにかくブームの最中は面白そうな商品をどんどん出しまくるう、と張り切っていた。原型製作で有名になった海洋堂は年に四回、ボーナスを支給したというからハンパじゃない。

何を隠そう、僕も食玩バブルに乗ったひとりだ。その海洋堂に声をかけ、食玩シリーズの総監督を始めたのだ。

最初に手がけたのは、『王立科学博物館』と銘打ったアポロ宇宙船や月着陸船を中心にした宇宙開発テーマの食玩。もともと世界最高レベルの海洋堂原型に、こだわりのリテークをガンガンいれて凝りまくった。これではとても採算が取れない、というわがまま放題な注文にも、バブルで気が大きくなっていた発売元タカラ（当時：現在のタカラトミー）も海洋堂も、「ま、金ならあるし」と鷹揚に応じてくれた。

このプロジェクトは金儲けではなく、文化事業と割り切ってくれ、と海洋堂の専務がタカラ社長に直談判してくれたおかげだ。究極の食玩をつくるう、という合言葉の元に、とんでもない企画が動き出した。

僕ももともと「物書き」である。それが総監督をつとめる企画なら、なにより食玩といえど「読み物」であるべきだ。「見るフィギュア」ではなく「読むフィギュア」へ。フィギュアには「読み取る情報量」を与え、さらに消費者には「読み取るリテラシー」を提供する。つまりオモチャであると同時に教材であり、感動を与える「作品」であることを目標とした。

そのため、なによりもこだわったのが解説書だ。普通の食玩なら、小さい紙切れにフィギュアの組み立て図がモノクロで載ってるだけ。シリーズのカラー写真があれば上等、という世界だ。

しかし『王立』のそれは全ページの折り畳みリーフレットになった。コラムや解説、図解、描き下ろしのマンガまで発注する。制作費に印刷費とつなぎのほりだが、なんせ「究極の食玩」なんだからしかたあるまい。

肝心のフィギュアだっすごかった。シリーズの中には、クリスタルガラスに七宝焼した透明な地球儀とか、ガラス内にレーザーで銀河系を封印彫刻」という商品まであった。どう考えてもひとつ数千円はかかるシロモノだ。

「経費がかかる？ ま、金ならあるし」と、誰もが美に太っ腹。製作発表を超一流ホテルでやったくらいだから、その狂いつぶりはいま考えると我が事ながら呆れてしまう。

シリーズは無事発売され、食玩としても記録的な販売を成功させた。評価も高く、米国スミソニアン航空宇宙博物館から「発売させてくれ」というオファーがあったくらいだ。

しかし、まったく儲からない。むしろ売れば売れるほど赤字。だって売値より原価が高かったから当たり前だ。僕は焦った。こつなればもつとこつな企画で取り返すしかない。

起死回生を狙う人は、必ずさらに大きいドツポにはまる。僕もその例に漏れず、さらに巨大な墓穴を掘ってしまった。究極の食玩、第二シリーズ、悪夢の『ドリームカー』がスタートしたのだ。

フィギュアの出来さえ良ければ、なんぼでも売れる。それはブームであってもバブルではない。食玩バブル、というのは、フィギュアの出来や商品の企画とは関係なく、とりあえず新製品ならなんでも売れる時期のことだ。

究極の食玩『王立科学博物館』は記録的な大ヒットを達成した。しかし、食玩なら宇宙開発のようなマイナーなテーマでも売れる、とブームはさらに過熱し、毎週数種類の新シリーズが発売されるようになる。

「シークレットやシアもので消費者を吊れば、いくらでも売れる」「質など二の次だ」「そんなことを平気で口にするケシカラン奴すら現れた。

さあ、これには海洋堂専務・宮脇氏が怒ること怒ること。「フチ以外の食玩メーカー、みんな死ね！」まるで芸人・たむらけんじが東京で売れなかった頃に吐いてた毒のような呪詛だ。

気持ちはわかる。海洋堂は造形者集団だ。つまり、いいモノをつくって評価されたい、が究極の目的である。食玩ブームで評価が上がるのはうれしけれど、バブル状態で、出来が悪くても食玩なら売れる、という状態になるのはイヤで当たり前なのだ。「こうなったら、あいつらに本気をガツンと見せたらんとアカン！」

年若い読者たちよ、こういふ正義感で進めた企画というのはたいして、えらいこと、になってしまふ。古代の賢人も言っている。「地獄への一本道は『正義』で舗装されている」と。正義感の配合率は二百パーセント程度にとどめよう。

ともあれ、僕と海洋堂は、究極の食玩をさらに進めた。正義百パーセントと使命百パーセント、合計二百パーセントの配合率で。

究極の食玩第二弾『タイムスリップグリコ・大阪万博編』、第三弾『ドリームカー』の企画がスタートしたのだ。

食玩業界のモンスター企画シリーズであるグリコのおマケ、それに大阪万博のシンボル太陽の塔やパビリオン（建物）やコンパニオンを、という企画である。

一方のドリームカーとは、一九五〇年代～六〇年代に米国のモーターショーで発表されたコンセプトカーのことだ。米国の景気が戦後最高に膨れあがっていたこの時期、自動車メーカー各社はそろって、未来の先取り、をテーマに夢のような車の開発計画を語った。

万博もドリームカーも、僕にとってはいつか作品化したかった生涯のテーマだ。海洋堂・宮脇氏も大阪万博世代なので、もつめちゃくちや入れ込んでつくってくれた。

しかし、バブルというのはいつか弾けて消える。前兆は中国のフィギュア生産工場だった。それまで長い間、海洋堂が中国にまで行って技術指導した工場が他のメーカーのフィギュアを引き受けはじめた。もちろん資本主義&自由経済だから文句は言えない。しかしすぐにそれらの工場はもっと割のいい携帯電話の製造へ生産ラインをシフトしてしまつた。

結果、フィギュアの生産を引き受けてくれる工場は奪い合いになる。有利な立場になった時、中国人はちゅうちよしない。いきなり三倍以上の賃上げを要求してきた。

すでに塗装段階に入っていた『万博テーマを歌う三波春男』のフィギュアなど、「和服の模様は塗れない」「どうしても和服の模様を塗って欲しいなら、顔や体と和服の色を同じにする」と通告された。

このままでは顔や手まで真っ青の、宇宙人みたいな三波春男ができてしまつ！ぼく達はパニックになった。

中国の安い人件費のおかげで成立した食玩ブーム。しかし世界中の製造業が同じ理由で殺到し、単価の安いフィギュアづくりなどがまっさきに断られた。渋る工場を説得したり、塗装を効率化して、それでもタイムスリップグリコの大阪万博編は無事に発売した。しかし問題はドリームカーである。

一九四〇年代～六〇年代、世界一豊かな米国の自動車メーカーが夢想した未来の車、それがドリームカーだ。

GM社の『ファイヤーバードⅢ』は全自動運転と障害物リーダーを備えていた。

リンカーン社のフューチュラは実際に教台試作され、テレビシリーズ『バットマン』でも初代バットモビルとして採用された。

独特の超流線型を誇るキャデラック社『サイクロン』は、車というよりまるでロケットだ。

フェラーリ社のまるつきりSF宇宙船な『モデューロ』を加えて合計四車種、すでに原型まで完成してしまっている。

なにせ海洋堂初の本格的ミニカーだ。タイヤホイールは金属製の特注品。車体の三次元曲線もいっさいの省略なしで完全に再現した。

当たり前だけど模型原型だけで死ぬほど金や手間がかかっている。食玩は売れるし、ま、金ならあるし、という時期とはいえ、やりすぎだったことは事実だ。

量産するのもかなりのコストになる。フロントグリルや車体を縁取るメッキはあたりまえ。オモチャっぽい分厚い窓ガラスなんてダメ！超薄アクリルで透明度の高い窓を再現しなきゃ！フィギュアだって当時の女性を最新モードで再現したい！

無茶だ。たとえ百万個売れても、絶対に儲からない。というよりつくればつくるだけ赤字になりかねない。

しかし、これだけではすまなかった。海洋堂も無茶だけど、僕は輪をかけてバカだった。フィギュアがそこまで頑張るなら僕だって究極の食玩パレットをつくりたい！

ドリームカーにふさわしく、架空のSF雑誌、それも全四十八ページオールカラーの雑誌を企画した。ドリームカーの紹介パンフではない。ドリームカーの巻頭特集記事が掲載されたSF雑誌、わずかにタテヨコ五センチほどのミニ雑誌だけと読み応えがあってフィギュアよりも精密で、印刷・製本技術の限界に挑戦するようなアイテムを準備しちゃったのだ。

折り込みのポスターまで考えた。マンガ家のトニーたけざき氏に、ドリームカー各車をテーマにしたイラストエッセイまで発注してしまった。

……その後のことは思い出すのもイヤだ。食玩パブルは崩壊し、クオリティを追求する時代は終わった。投資したお金や時間は戻らない。なによりも、一度は信じた夢が壊れて、欠片を拾うように残務処理するのは心がささくれ立つような気がする。権利処理やフィギュアの転用先の交渉、スポンサー企業の合併や事業部閉鎖……。

しかし、僕の黒歴史はこれだけで終わってはくれなかった。この夏、久しぶりに会ったトニーたけざきさんに言われてしまったのだ。

「あのく、例のドリームカー、ラフ原稿できたんですけど……」

「あ、ちょっと待て！何年前の話だよ！締め切りを何年遅らせたんだ？」

ドリームカーという悪夢はまだ覚めない。次回、トニー氏のイラストを刮目して待て！



「岡田さん、例のドリームカーの原稿、実はラフができてるんですよ」

この夏、久しぶりに会ったトニーだけざきさんの言葉で悪夢はよみがえった。

ドリームカー！ 夢の車！ という意味とはうらはらに、僕も海洋堂もメーカーさんもさんざん地獄を見た企画である。

そういえば、その企画の二環としてトニーさんに原稿を発注したような気がする。いや、打合せに大阪まで行ったのは確かなんだけど、具体的に発注できたかどうかは定かではない。

この業界、企画が没になるのは当たり前。現実化した企画のみ予算がついて支払いが発生する。申し訳なさでいっばいの僕にトニーさんは「原稿料は要りませんから」とラフを送ってくれた。

というわけで、今回お見せするのはトニーさんの描いてくれたドリームカー食玩にオマケとしてつくはずだったイラストのラフだ。天才的に上手い画力を馬鹿なことには使わない、というのがトニー流。おバカなことには慣れっこの僕も、心の底から脱力してしまった。

ああ、関係者が総力を挙げて取り組んだドリームカーにこのイラスト載せなくて正解だったかも。

しかし、である。かつての食玩バブルは去ってしまったけど、ダイエット本の成功でつい気が大きくなってしまった僕は、このイラストの完成型を見たくなくなってしまった。

だって、トニーだけざきだよー！

『岸和田博士の科学的愛情』や『トニーだけざきのガンダム漫画』など傑作を連発するマンガ家さんだ。画力はもう天才すぎて、ガンダムの漫画を本当に描いている安彦良和自身が「俺の描いた絵かトニーの描いたパロディーか見分けが付かない」とボヤいているほどだ。

「ギョッ、出します。そのラフ、仕上げてくださいー！」

トニーさんは驚きながらも喜んで、超ノリノリでカラーイラストを仕上げてくれた。次号、ついにトニーだけざきの語る、夢の二十一世紀の自動車、がバールを脱ぐー！

数年前、僕や海洋堂や某オモチャメーカーが食玩バブル景気に翻弄されて、つい、企画してしまった究極の食玩『ドリームカー』。

本体のミニカーだけでなく、付属のパンフレットも、究極のものにしたかった。名刺の半分サイズなのに全四十八ページの雑誌で、短編SF小説や六〇年代っぽい最新科学情報も入れた、レトロフューチャーっぽさ満載の内容を企画した。その巻頭企画としてフィギュアの解説を入れようとしたわけだ。ああ、我ながらなんてセンスがいいんだろう。

折り込みグラビアページにはもちろんドリームカーのカッコいい写真。しかしその裏は？ うーん、ドリームカーがもつと身近に感じられるイラスト、漫画っぽいイラストなんかいいなあ。レトロフューチャーっぽい路線で自動車をカッコよく描けて面白くて……。

そつだ、トニーたけざきさんをお願いしよう！

大阪までトニーさんに会いに行き、初対面の僕は緊張しながら依頼すると、トニーさんは「ドリームカーのこと、あんまり知らないからな」と微妙に不安なことを言いながら引き受けてくれた。「いや、内容はお任せします！」

たしかにこんなこと、口走った気もする。

しかし、である。食玩バブル崩壊後、数年経つたいま、やっと上がってきた原稿がコレである。

お笑いドリームカー。

たしかに「なに描いてもいい」とは言った。原稿料も払いますよ。約束だし、まあ金ならあるし。

でも、でも、こんなのドリームカーじゃない！ 夢の二十一世紀じゃない！ トニーのバカー！ イラストは次回も続くぞ！

二カ月に渡ってお届けした大河連載、<sup>〃</sup>究極の食玩騒動記<sup>〃</sup>も今回で最後だ。  
いや、これ以上なにか追加するようなエピソードがあるわけじゃない。才能を無駄遣いすることにかけては天才のトニーたけざき氏から、さらに二枚のイラストがアップした。それを脱力しながら見るだけだ。

お題は僕の大好きなドリームカー『リンカーン・フューチュラ』。六〇年代のTVシリーズ『バットマン』ではバットモービルとして大活躍した車である。

なのにこのイラストを見て欲しい。

リンカーン星からやってきたナゾの生物フューチュラ<sup>〃</sup> お色気モンスター<sup>〃</sup>

トニーさんからのメッセージは「昔の少年誌っぽい赤と黒だけのグラフィックイラストも描いちゃいました」とあくまでうれしそうだった。いや、僕も確かに大笑いしたよ。こういうイラストは大好きだし。

でもね、これは<sup>〃</sup>究極の食玩・ドリームカー<sup>〃</sup>に掲載されるはずだったイラストなんだよ。もっと世のカッコいい好きな人たちに評価されてしかるべき車なのだ。『フルータス』とか『Pen』とか、代官山のカフェに置かれる雑誌に掲載されて欲しい。言っちゃ悪いけど、この週刊アスキーでトニーたけざきの悪ふざけイラストで汚されるような車じゃない。

あああ、でも悔しいけど、このイラスト、面白いなあ。

いつも、お金V時間という不等号がなりたつ時代。それが、若さだ。若い頃は、金がないんだから時間がかかるのは当たり前」と思っていた。電車賃が無ければ平気で二駅へらい歩いて友達に会いに行く。好きなシーンを一瞬みただけにオールナイト映画に泊まり込むことも惜しくなかった。

しかし、年齢を重ねたある日、時間Vお金”になっている自分に気がつく。自分の脚で探し回る手間が惜しくて、ネットショップでまとめ買いくる。プラモデルをつくらなくなって、完成品フィギュアを飾るようになって。金で時間を買おうとするわけだ。だから、大人にとって最高の贅沢とは、時間の無駄遣い”である。

トーベ・ヤンソン原作の『ムーミンパパの思い出』に登場する『海のオーケストラ号』という船がある。最後には水陸空どこでも行ける万能船となった。トーベ自身はこの船のイラストをたった三枚しか残していない。大きな窓、側面にすらりと並んだ探照灯、ずんぐりむっくりのボディ。僕は昔からこの船が好きで、いったい内部構造はどうなっているのか、とか年中妄想して遊んでいた。

しかしこの冬、ついに妄想だけではおさまらなくなると、立体化にチャレンジしてみました。いやこれがもう、手間を喰らうやー。このページの写真で紹介した段階で、まだ全体の三分の一くらい。ここまでですべてに二百時間以上は使っている。これだけの手間と時間をかけたら、絶対に書き下ろし本の三冊や四冊、楽に仕上がっているはずだ。こんな模型に二百時間も使っちゃうくらいなら、スポーツカーや超高級腕時計にでもハマった方がよっぽど安くつく。

クリスマスも年末もお正月も、僕はずっとこの模型をつくらっていた。大人にとって、たしかに最高の贅沢は、時間の無駄遣い”であることは間違いない。しかし僕が手を出しているのは、人生の無駄遣い”ではないだろっか？

デスクトップモデルとは、名の通り机の上に飾る模型のことだ。

映画で軍人の机上に飾ってあるアレのこと。NASAのフォン・ブ라운博士もアポロ宇宙船やサターンロケットを、ウォルト・ディズニーだって『海底二万マイル』の潜水艦ノーチラス号の模型を机上に飾っていた。

かっこいい！ 大人なのに、机に模型を飾っている。子供だった僕は、びっくりした。オモチャみたいに窓が開いたりエンジンが見えたりする訳じゃない。飾るだけ、ディプレイのみ。そういうちゃらちゃらしてない、大人なカッコよさにも、心奪われた。

当時の僕は、お小遣いをはたいてプラモデルをつくる日々だった。戦闘機も飛行機も宇宙船も数え切れないほどつくったが、どんなにきれいにつくって飾っても、親からは邪魔なおもちゃ以上の扱いを受けたことはない。「そんなおもちゃからは、いい加減卒業しなさい」と無理に捨てられたこともある。

だからこそ、机にさりげなく模型を飾る大人に衝撃を受けたのだ。

しかし二十年前、すっかり中年男になった僕は表参道で『ウィングクラブ』というデスクトップモデル専門店を見つけた。ショーケースには、大小さまざま、でも精密で美しい模型が飾られている。片手で持てるような小型でも五万円。大きくて内部構造が見えているようなものは、五十万円〜百万円を超える。値段まで大人っぽいのだ。

二十年前の僕は貧乏だった。アニメを作るために大阪から上京し、結果三千万以上の借金をかかえていた。何万円もする模型を買うわけもなく、ひたすら見ることしかできない。それでも、そんな素敵なものが世の中に売られている、それだけで興奮した。お金をためれば買つことができる。それがわかっただけでも嬉しくて、僕は一時間以上もじっくり見てまわって、何も買わずに帰った。

その後、ほぼ二年に一度のペースでこの店に来る。五万円の模型を買えるような時期もあった。それでも、「ま、金ならあるし」と買ってしまったことは、どうしてもできなかった。

子供の頃、百円二百円のプラモを買うのにあんなに悩んで買っていた自分としては、つい、考えてしまう。目の前に美しいゼロ戦の模型がある。買おうかな、と思った瞬間、こんな声が聞こえてくる。

おい、五万円も払うほど本当に好きなのか？ 好きなら、なぜ今までゼロ戦のプラモを買ってないんだ？

たしかに大人になってから、ゼロ戦のプラモは五百円のひとつも買ってない。五万円の完成品を買つより先に、五百円のプラモを百個買いたい。それが本当の「好き」という気持ちじゃないのか？ いや、それより材木から削りだしてゼロ戦を作るべきだ。これこそ、本物ではないのか？ 単にお金もっているから買えるという安易な気持ち。それは模型への冒涜ではないのか？

好きという気持ちは、どうも、ものごとをややこしくするものだ。というわけでこの二十年、僕はいつもケースのすみずみまで見て、バッジやシールなど数百円の買物をするだけだった。

さんさんウィンドウを見てまわってから、引き揚げるときに言っせりっは決まっていた。

「『NF104A』はありますか？」

かなりマイナーな機種なので、店員さんの答えも決まっていた。

「ないですねえ。『F104』ならあると聞いては？」

その答えを聞いて、ふつや／＼自分を納得させ、帰ることができたのだ。ならとわかっただけで、毎回同じ事をたまねる。この儀式が、何も買わない恥ずかしさ、とかをなんとかごまかしてくれたのだ。

しかし先日、二十年目の儀式がついに破られるときが来た。店に入った僕に店長さんがうれしそうに告げたのだ。

「NF104A」

冷や中華じゃあるまいし。。「」。なせそんなものが、今（今）

「NF104A」、ありますよー！」

僕の体は一瞬、スパロームサイルの直撃を受けたように固まった。

お金がない時期は、それが理由で買えなかった。お金がある時期でも、自分の「模型が好き」という気持ちに自信がなくて、二十年間ずっと「見るだけ」のダメな客だった。そんな僕が、何も買わずに店を出るときに「NF104A、ありますか?」「ないです」だったのだ。

最後の有人戦闘機『F104』は、五〇年代に米国で開発されたジェット機だ。正式名称は『ロッキードF104』。七〇年代に田中角栄首相を退陣させ、戦後最大の政変となったロッキード事件にも関係が深い。鉛筆みたいに細長く尖ったボディに小さい翼、愛称のスターファイターという名どおり、ロケットそのものの形をしている。

頭のNは、NASA仕様という意味。宇宙飛行士の訓練用機体としてロケットブースターをつけた特別機で、大気の流れを飛び出して成層圏まで上昇できる。成層圏と言えはほぼ大気圏外、つまり宇宙の底だ。史上初、宇宙へ行くジェット戦闘機であり、僕が一番好きな映画『ライトスタッフ』でのクライマックスシーン、チャック・イエーガー飛行士が、高度記録を出したのもこの機体なのだ。……とNF104Aに関して語りだしたら、連載十回でも足りない。要はNF104Aなんてマイナーな機体はあるわけがなく、僕はそれをいつもお店で自分へのギフトにしてわけた。

ところが先日、いきなり店長に「NF104A、もうすぐ入荷しますよ」と言われてしまった。事の発端はある外人コレクター。F104とNF104Aの違いがわかる資料をそろえ、変更点ごと細かく指摘しながら特別注文した。彼の熱意に打たれ注文どおりにつくることができたけど、お店としては一機では採算もとれない。店頭に飾りたいので、しかたなく二機つくった。それがあと三カ月ほどで完成するらしい。

懂れのNF104A。特注でおそろしくレキが良く、この世に今のところあと一機しかない。価格はあんがいお安く、ヒトケタの〇万円。自分で資料を調べて発注する時間と手間を考えれば、実はとびきりお買い得である。

「買います!」と叫んで財布を取り出した。しかしその瞬間、僕も店長さんも凍り付いてしまった。

僕はあいかわらず、いつものジレンマである。本当に〇万円支払うだけの「気持ち」が自分にはあるのか。単に「お買い得」で「まあ金ならあるし」という、自分の気持ち自身を盲流するやうな動機じゃないのか?

店長さんの引きつった笑顔はもうちよっと微妙だ。え、いまこの客に売っちゃっていいのかな? たしかに在庫リスクはなくなったけど、せめて一二月は店頭ケースで展示したいよな。展示したらほかに何機か注文があるかもしれない。せっかく特注した二機でも、完成して即納品だったら宣伝にもならない。でも目の前のお客は買っていて言ってくれているし、在庫リスクはある。

もうお互い「買ってくれるの?」「売ってくれるの?」「買ってちょうどの?」「売ってちょうどの?」という嬉しいやうな辛いやうな、心の綱引き状態なのだ。無言で見つめ合つこと数秒、極限まで張り詰めた緊張の糸はぷつんと切れた。店員さんがぼつりと言ったのだ。

「じゃあ納品はクリスマス前ですね」

自分へのクリスマスプレゼント!これだ、欲しかったのはこのセリフだ!

なにも買わずに店を出るときに「NF104Aと同じく、数万円する模型を買ってこなくても、NF104Aだから」というギフトが欲しかったのだ。

肩から力が抜けた僕は支払いを済ませて、あとは納品を待つだけになった。

しかし、まだなにやら落ち着かない。今のままの僕では、NF104A様をお家に迎える資格などないやうな気がする。なにか修行みたいなものが

必要じゃないだろうか？) 続く



表参道の高級模型店に通い詰めて二十年目、ついに僕は憧れのNASA使用ジェット機『NF104A』を予約した。NF104Aが登場する映画『ライトスタッフ』をDVDで見返したり、ネットで『F104』『NF104A』などと検索したり、とにかくやたら落ち着きがない。

ああ、どうしよう。ついに、生まれて初めて、デスクトップモデルを買ってしまった。買ったからといって、それだけで自分がウォルト・ディズニーやフォン・ブラウンになれるわけではない。そんなことは百も承知だけど、机の上にデスクトップモデルを飾るのにふさわしい大人の男に、少しは近付いているのだろうか？

考えてみると、彼らにとつて机に模型を飾ることは仕事の一部分なのだ。飾ることに必然性がある。だからこそ、かつこい。

僕は軍人でも科学者でもない。ロケットもつくってないし、映画も今はつくってない。航空会社につとめているわけでもないし、自衛隊や防衛省と取引もない。

ダイエツト本のヒットで、まあ、金ならあるし、と買ってしまった僕に、NF104Aを飾る資格があるのだろうか？ 黄金の体重計なら資格はじゅうぶんあるだろうけど。

NF104Aがうちに来る。

僕は、新妻を迎える新郎のように緊張した。

遅ればせながら、少しでもNF104Aにふさわしい僕になっていたい。

帰り際を買ってきたF104のメタルバッチを見ながら決心した。

神田の神保町に行って、航空雑誌のバックナンバーを漁り、F104特集号を二冊も買ってきた。結婚の報告を親せきや隣近所にするように、会った人にNF104Aを買った話をした。当たり前だけど、NF104Aを語るにはまずF104を説明しなければならぬ。そしてもちろん、普通の人はF104だつて知っちゃいないのだ。必然的に僕の話は長くなり、迷惑指数は幾何級数的に、NF104Aの高度記録並みに上昇した。

森三中の村上さんや黒柳徹子さん、アナウンサーの安住さんまで僕のF104話の犠牲者になった。テレビ局の廊下ですれ違っただけのハイキングウォーキングQ太郎さんに話しかけるのはさすがに自制したけど、楽屋で打ち合わせを待っている構成作家が身代わりの犠牲になった。

ジャケットにさりげなくF104のバッチをつけてNHKに出演した。最近、事務所にあるショーケースの模様替えに、あれこれ心砕いている。

あれもこれも、すべてNF104Aにふさわしい男になりたい、と思えばこそだ。身分違いの恋は楽しいかもしれない。でも現実の結婚となると、こんなにプレッシャーがかかるんだろう。

藤原紀香さんと結婚した陣内智則さんも、こんな気分だったんだろうか。ごめんよ、陣内。今まで僕は君のことを笑っていたよ。いまこそ、君の気持ちかわかる。高嶺の花を嫁にもらうといつのは、こんなにキツイものだったんだね。

NF104Aがうちに来るまで、僕の花婿修業は続くのだ。

学生時代、友達と一緒にボストンの世界SF大会に行った。そこでカルチャーショックを受けたのが、なにより、金と時間をかけた大人文化としてのSFだ。

アメリカ中のSFファンが集うその祭典では、華やかなコスプレに身を包んだ人々が闊歩し、体育館より広い場所に、見渡す限りフリーマーケットふうのお店が並んでいる。平机に飾られたアイテムは多種多様。

日本では入手不可能な様々な映画のポスター。様々なイラストのTシャツ、バッチ、ワッペン。どれもが、メジャー作品からマイナー作品までそろっている。

違法が合法かわからないビデオテープ。手づくりの組立模型（ここでガレージキットという呼び方を初めて知った）。模造刀、アクセサリ、コスプレ衣装。

すべてが、見たこともない宝の山だった。

このときの衝撃がキッカケで、僕は後にSF専門店を開店させる。一九八二年一月、大阪の桃谷という焼肉の香りが流れる町で、世界初のSF専門店『セネラルプロダクツ』は生まれた。

この店のコンセプトは、あらゆる商品がオリジナル、ということ。最近、あちこちで見かける雑貨店なんかとは根本的に志が違つ。世界中の面白い雑貨をそろえてみました、という安易なものではない。店長自らが海外に行つてセレクトしようが、所詮、売っているものを集めたにすぎない。

世界中でどこにも売っていない商品を、自分たちが企画し、漫画家やアニメーターにイラストを発注し、量産する。あるいは模型の原型を発注し、パッケージやアセンブルをデザインしてもらつ。開店当初、ガレージキットは自分たちの手で型取りをして、量産していたくらいだ。

どつやー！ こんな店、どこにも見たことないやろー！

僕たちの鼻息が荒かったことは言うまでもない。

しかし、出資者である僕の両親を含め、周囲の大人たちの目は厳しい。

「こんな店、三カ月もたへんわ」と、内装をした大工さんにまで言われた。

が、ふたを開けてみると、自分たちの樂觀的な予想すらはるかに上回る大盛況。開店時間には、近所の人何事かと見に来るくらいの行列ができた。開店初日から売り切れが続出。三日目には、棚の半分がからっぽになった。

人気商品のTシャツやマグカップは追加量産に時間がかかる。それなのに、出資者である両親は、多めの量産を許してくれない。あいかわらず、売れることが信じられないのだ。

ガレージキットは、毎日少しずつしかつくれない。友達を片っ端から引き取り込んでつくらせたが、棚に置けばすぐに売れてしまう。結局、空の棚とその後ろの白い壁が目立つ店になった。

「〇〇はありますか？」とどうも聞くと、「すみません。品切れです」と答える日々。それは、一カ月経つても、三カ月経つてもなかなか改善されなかった。

量産体制が整ってきた頃に、通信販売を始めた。珍しい店、ということと、ズームイン朝から取材も来た。結果、白い壁はますます広がった。店の商品が売れまくるのはどうにか...

誰もがイエスと答えるこの質問に、その時の僕たちは、お氣樂にうなずけなかった。遠くから来た客が肩をおとして帰っていく後姿を見送りながら、何とかしなければ、とさすがに焦った。

新製品の開発には、やたら時間がかかる。メーカーと同じか、それ以上の手間をかけているのだから、あたりまえだ。開発費も時間もかかるし、売れなかったときのリスクも大きい。

そこで思いついたのが、心の原点・アメリカだ。

アメリカに買い出しに行こう！ アメリカには、なんでも揃って違うしー！

(続く)

田舎者ほど東京に行けば何でもあると思っている。いたるところをスターやアイドルが闊歩し、新宿や渋谷、六本木が歩いて五分圏内だと思えば。同様に、ゼネプロを始めたころの僕は、アメリカに行けば何でもあると思っていた。田舎者の勘違いだった。ボストンの世界SF大会で僕が衝撃を受けた巨大フリーマーケットだって、ちゃんと理由がある。

日本みたいに同人誌主体ではなく、グッズ中心になるのは「平均的なアメリカ人は絵がヘタだから」「印刷技術も低く、日本より割高だから」という単純な理由だった。日本人の手先が器用なものには定評があるが、普通のアメリカ人は驚くほど絵が下手だ。日本の子供はみんなお絵描きや落書きで腕を磨くが、アメリカ人は小さい頃から落書きをあまりしない。

あと、日本みたいに同人誌に対しての「お目こぼし」が少ない。すべてFBIに通報されて没収される、という話も聞いたことがあるくらいだ。かわりに発達したのが、「コスプレやグッズのコレクション」だった。当時の僕はそういう日米の文化差に気づかなかった。アメリカには何でもある、という「感動」を日本で再現するために、すべてオリジナル商品のショップを作ろうと考えたのだ。

落ち着け、俺。

あのフリマで売ったのは、全米から集めてきたグッズであって、オリジナルばかりではなかったはずだ。毎年SF大会に来る人たちにとっては、目新しいものは半分もなかったらだろつ。

だが、こんな勘違いこそが文化を促進するエネルギーになる。九月頭の値下がりでロスまで往復のエコノミーチケットは十万円まで下がっていた。さいわい、店の売り上げは順調だ。

「まあ、金ならあるし」と、僕は相棒・武田さんの分をあわせて二枚、航空券を手に入れた。

これでSFグッズを買いまくろうつーもつ「白壁」とはおさらばだ。

渡米を決めるとすぐ、アメリカ事情に詳しいHさんに教えを乞った。彼は特撮雑誌の有名ライターで、買いまくりツアーの話をするど、「そんなの楽勝やでー」と太鼓判を押した。「ロスに行けば、見たこともないSFグッズ買い放題やーまずハリウッドではサンセット通りのラリーエドモンド・ブックストアに行かなアカン！」

世界SF大会で見た無限のSFグッズが、ハリウッドの大通りにそって店を並べてる光景を思い浮かべた僕は、必死でメモをとった。

「あとは、バンナイズのツイザラスで、仕上げやな。おい、もう成功したも同然やんか！」

Hさんに背中をどやされ、僕は必死でバンナイズだのツイザラスだの、初めて聞く単語を覚えようとした。

店の通帳にある現金、たった30万をすべてトラベラーズチェックに換金し、ついに僕たちはアメリカへ飛んだ。

L A空港で慣れない英語でレンタカーを借り、Hさんから「便利で格安」と教えてもらったハリウッドどまんかのホテルによつやと到着したときは、すでに夕暮れというにも暗すぎる頃だ。しかし、目の前の鉄格子と南京錠と監視窓がそびえ立つ、この要塞のような、あるいは監獄のような建物はナニ？これがひょっとしてホテル？

嫌な予感の中しした。(続く)

ハリウッドという場所は存在しない。ハリウッド大通りのマンズ・チャイニーズシアターあたりがそれに該当する地域だ。

しかしこの治安の悪さはなんだろう？ 通りはホームレスとゴミであふれ、お店の入り口では、シャツを着てない奴や靴をはいてない奴は客とみなさない！ 二十ドル札以上は使えません（偽札防止のため） という物騒な張り紙が僕たちを威嚇する。華やかなハリウッドのおっかない素顔に僕たちは圧倒された。

ホテルは、チャイニーズシアターから徒歩三分、本当にハリウッドのごまんなかにあった。鉄格子と南京錠と監視カメラで武装した灰色のコンクリートの塊。それがこの街では、安心とくつろぎの証明なのだ。

呼び鈴を押す。気配がして鉄板張りの分厚いドアの細長いのぞき窓が開く。

「ヨヤクしてまちゅー！ ミスターオカダとタケダでちゅー！ ニホンから来ましたー！」とへたな英語で叫ぶとようやくと鍵を開ける音が数度繰り返されて、鉄格子に続いて分厚いドアが開いた。

入り口の裸電球が強烈な印象だ。もちろん素泊まり。食事もレストランも売店もない。エアコンもテレビも駐車場もない。出入りのたび、僕以上に英語が下手な中国人オーナーの疑り深いチェックを受ける。とりあえず、パスポートとトラベラーズチェックだけは、肌身離さず持っておこうと決心した。

アメリカのお店の閉店は早く、もつすべつ方になる。のんびりしてはいられない。あさつてには帰りの飛行機に乗らなくてはいけない貧乏出張なのだ。まずは、歩いていけるショップに目標設定。ハリウッド大通りのラリーエドマント・ブックストアに向かう。Hさんから「SF映画のグッズとかポスター、ナンボでもあるでー！」と聞いた店だ。

小ぶりの店は映画ポスターであふれかえっていた。『スターウォーズ』や『007』といったメジャー映画のポスターから、マイナーな作品まで、年季の入った棚には折りたたんだポスターが無限に並ぶ。店主のラリーに頼むと折り目のないままさらなポスターを出してくれるんだけど、これがもう！ どうやって保存してたんだと首をかしげなくなるような、たったいま印刷されてきたようなインクの匂いがムンムンするような美品ポスターなのだ。

もちろん、SF映画もいっぱいあった。『妖怪巨大女』なる脱力系の邦題で知られる『アタック・オブ・50フィート・ウーマン』という三流SF映画のポスターを見つけて歓声をあげた僕たちは、店中の冷たい視線を浴び……、いや違う。店員やお客たちも「なんだお前、わかっているじゃん！」と笑顔を返してくれる。

僕たちは夢中でSF映画のポスターを掘り出しまくった。『地球爆破作戦』『サイレントランニング』『ミクロの決死圏』そしてもちろん『二〇〇一年宇宙の旅』。有名から日本未公開作品まで、乏しい資金と相談しながら買いあさり、気がつくつとすでに外はまっくら。閉店時間になって腕が抜けるほど大量のSF映画や原作ペーパーバック、シナリオやスチル写真を買ひ込んだ。興奮で頬を真っ赤にした僕たちはデリに寄ってアメリカではじめての食事をカウンター席で腹いっぱい詰めた。オムレットやハンバーガー、分厚いパンケーキにはもちろんこれでもか、とメープルシロップ。おかわり無料のコーヒーで流し込みながら、もう我慢できず初日の戦果品を狭いカウンター席で広げる。そこにはもう、夢のようなSF映画の数々……。

「なんや、アメリカ買い出し旅行、楽勝やんかー！」

武田さんの言葉に僕は強くなつた。でも、楽勝はこの初日だけの甘い夢だった……。

時差ぼけと興奮でろくに眠れやしなかった。SFグッズ買い出し旅行の二日目、明日はもつ出国だ。焦って起き出したはいけど、アメリカの店の朝は遅い。遅いだけでなく時間にルーズだ。十一時前になっても、ハリウッド大通りのシャッターは閉じていた。

「とりあえずなにか食べよう。毎日二十四時間、二ドル九十八セントの朝食を出します！」のポスターに武田さんと顔を見合わせて笑った。「朝ご飯ちやうやん」

顔よりでかいバターミルクパンケーキ、バターたっぷりのワッフル。コーンビーフとジャガイモを炒めただけで、なぜあんなに美味しいのか不思議なホームポテト。とびきり新鮮なミルクと卵で作ったオムレツ。薄くてパリパリに焼き上げたトーストとベーコン……。僕はいまだに、世界で一番美味しい朝食はアメリカのダイナーで食べるニドルの朝食だと信じてる。

元氣を取り戻した僕たちは大通りの店を片っ端からまわった。しかしHさんに教えてもらったオモチャ屋は手品専門店に、映画の小道具を売ってるはずの店はタロットカードを売ってるだけだった。

「やばいな……」

僕たちは焦りだした。すでに午後二時。早い店は四時半に閉店する。これまでの戦果は昨日買ったポスターだけだ。明日の出国時間は十一時、つまり買い出しのチャンスはどう考えてもあと数時間しかない。日本を出るときに持ち出した二二〇〇ドル、たった三十万円の軍資金すら使い切らずにタイムアウトになるのだろうか。このまま、ろくに買う商品が無かったら。安売りの航空券代も安ホテル代も、単なる無駄な出費になってしまう。

「トイザラス、行ってみるか？」武田さんがつぶやいた。正直、気が進まなかった。ハリウッド大通りなら正確な住所などわからなくても歩いて探し回れる。しかし、バンナイズをまつすべ行つたところ」としかわからない。だいたい、バンナイズって何なんだよ！

万策尽きた僕たちは、収容所みたいなホテルのアジア系オーナーに尋ねた。

「バンナイズはロスの北部を走る道路ヨ。テキサコの地図があるからあげる。タダでいいヨ」えー。この強欲オヤジがタダでものをくれる？

「あんた達、ここで買った物を日本で売る？ そつダロ？」観光ビザで入国した僕たちは、気まずそうに目を合わせた。「こっちの国で安く買って、あつちで高く売る。みんな同じ。そつやつて商売を大きくすル。そしたら、またつちで泊まればいい」

オヤジの僕よりも下手くそな英語は、見知らぬ異国の治安の悪い地区で、それでも安ホテルオーナーとして一國一城の主として成功した男の言葉だった。

ハーツで借りたフォードのステーションワゴンに乗り込む。アメ車特有のただっ広いキャビンを見渡して決心した。このキャビン一杯に玩具を買い込んで帰国する。そして売って売って売りまくって、儲けた金でまたこのホテルに来るんだ！

ステーションワゴンで夕暮れのバンナイズ通りをぶっ飛ばす。どこまでも続く街路樹と住宅と、そして荒野。あの地平線に陽が落ちるまでに、店に着けるのだろうか？

「なんでもアルで！」とHさんが請けあった店。摩訶不思議な響きをもつ「トイザラス」というオモチャ屋。奇跡のオモチャ屋を探して、僕たちは口サンゼルスを上した。

一〇一号线、通称ハリウッド・フリーウェイを北上して一七〇号線の交差点を西へ。埃っぽいLAの夕焼けに向かいベンチュラ・フリーウェイをシャーマンオークスで降りれば、真北にむかっただけでも延びる一本道がある。そこがバンナイズ通りだ。

日本から米国へオモチャを買い付けに来た僕たちがてっきり地名だと思っていたバンナイズは、ひたすら広くてとにかく長い道の名前だった。

「バンナイズを行けば、絶対にわかるから」というHさんの言葉を信じて、一時間近く走ってるけど、どこにもタイザラスは見つからない。タンクが空になるほど走ったので、とりあえずガソリンスタンドに入り、人の良さそうなおじさんに聞いてみた。

「どうですかー！ どうですかー、えーと、どうですかー。どうですかー！」

しばらく悩んでいたおじさんは地図の一点を自信を持って指さした。やった！ ついにタイザラスを見つけた！

しかし五分後、僕たちは寂れた食料品店の前で立ちつくしていた。

『TOY'S SHOP』

タイさんの食料品店。どうやら卵やミルクが安いらさう...

武田さんが笑い出した。笑ってる場合じゃないーとキしかけた僕も、いつしよに笑ってしまっ。二人でタイさんの店を見上げて、ヒステリックな笑いがとまらない。店の中には正体不明なビニール製オモチャを売っている。

「岡田君、トイショップで宇宙フィギュアやで。買えば？」「ええんですね？ ホンマに買いますよー！」

息も絶え絶えに笑いながら、バンカメリカのトラバラスチェックで買い物をする、店主は不思議そうに僕たちを見送った。

タイザラスは、タイさんの食料品店より五分の距離にあった。夜空に輝く巨大なネオンサインと、フリーウェイいっぱい広がる「ようこそタイザラスへーあと1/2マイル」という看板。 どんな馬鹿者でも、たとえば日本から来たSFファンでも見逃しようがない。「バンナイズをバクッと走ったら、絶対に見つかるって」というHさんの言葉にウソはなかったのだ。

閉店時間を気にしながら、店に入る。そこは、僕たちが知っていた、おもちゃ屋、という言葉とはほど遠い、広大な敷地が広がっていた。

野球がらくらくできそうな広さに、天井も見上げると首が痛いほど高い。後に知ったけど、バンナイズのタイザラスは本場アメリカでも最大規模だったのだ。高さ八メートル以上あるスチール棚には整然と商品が積み上がり、はるか向こう側の壁面までまるで合わせ鏡のトリックみだいに並んでいた。

入口を右に曲がると、まずベビーカー売り場だった。テニスコートより広い面積、三階建てのビルくらいある商品棚に見渡す限りのベビーカー。歩いて歩いてもベビーカー。

次の売り場は、どこまで行っても三輪車。歩いて歩いても三輪車。次は、幼児用の補助輪つき自転車。歩くのに疲れ果てた頃に、子ども用自転車の海が広がっていた。

さすがに焦ってくる。この店、地図はないのか？ 店員さんに聞きたくても、広すぎてどこに行けるかもわからなう。

とりあえず入口まで戻り、地図を見つけて巨大なカートを引っ張り出した。

小さな運動場ほどのママゴト売り場を小走りに抜けると、やっとフィギュア売り場を見つけた。

見たこともないほど大量のスターウォーズのアクション・フィギュア。

ここは宝の山だ！

二十年以上前の話である。

スターウォーズにはじまるSF映画ブームに日本が沸いていた時代、世界初のSF専門店を開いた僕たちは、店で売る商品の不足に悩んでいた。そこでSFの本場アメリカに飛んで、当時誰も知らなかった巨大オモチャ店トイザらスをついに見つけた。いま目の前に宝の山がある！

日本ではキティランドや博物館べらういでお目にかかれないスターウォーズのアクションフィギュア。一体二千円以上はしたはまだ。それがここではたった九十八セント。ダブルベッドくらいある特大カートに、狂ったようにフィギュアを詰め込んだ。あつという間に満杯になり、二台目、三台目のカートも山積みになった。スタートレックのマグカップや、インディ・ジョーンズの寝袋など、とにかくSF系作品の雑貨もカートに放り込んだ。さすがに目立つのか、店員がこちらをチラチラ見ているような気がする。なんだか不安になってきた。「君たちそんなにたくさん買ってどうするの？ え？ 日本で売る？ それはダメだよ」と言ってきた。アメリカは権利とかうるさいし、勝手に輸出したら違法かも。どうしよう。閉店直前にレジに商品を積み上げ、POSで武田さんと小声で相談する。

「これは全部プレゼントやねん」と武田さんがささやいた。「アメリカ人どうせ日本のこと知らんやろ。日本にはお盆やお彼岸やお月見の時に子供にオモチャをあげる習慣がある、と言いつ張ろう。日本人は第二次大戦に負けてからずっと貧乏で、どの家にも兄弟がぎょうさんいる。僕らも若く見えるけど、子供六人に甥っ子姪っ子三十人以上、とか言ったらエエねん」「は、ムチャクチャやけど、なんか説得力ありますね」「じゃあ岡田君、英語で言つてね」「ええついで」

たしかに、車の免許を持ってない僕は、アメリカでは通訳を一手に引き受けていたのだ。

「え、じゃばにーず はず めにめに ちるどれん。あい はぶ あ ろつと おぶら ふあみりー。ねんすつうらーく ぶつだ ばーすどい。せつ おおーる ぶれぜんと。プレゼント!!」

レジでひきつった笑いを浮かべながら汗みどろになる僕を黒人のおばさんは冷たく見返し、マイクに向かった。

「マイク ナンバー フリーズ」

店長マイクが七番レジ、つまり僕たちの前に呼ばれた。レジのおばさんはうさぐさげに僕を指さし、マイクに口早にまくし立てている。

もうダメだ。FBIだか連邦商務局だかに通報されて、僕たちは関税法違反とかで逮捕される。商品は没収されて、僕たちは国外追放になり、パスポートには再入国禁止のスタンプが押されて、そして店で売るものはなにもなくなるんだ！

店長のマイクが僕に話しかけた。よく聞き取れない。

「You need gift apps?」

「おふと ぶあつと」

「Gift apps・Do you need gift apps for your presents?」

ああ、なんと親切なことに彼らは「プレゼント用の包み紙はいらないか?」と聞いてくれたのだ。

目まがいするほど安堵した僕たちは申し出を丁寧で断って、五ドルや一ドルのトトラペラースチェックに何十枚もサインして店を出た。フォードのステーションワゴンいっぱいにオモチャを詰め込み、帰り道はニヤニヤ笑いが止まらなかった。



ついにアメリカで商品を仕入れたぞ！ この車いっぱい！  
『ルパン三世カリオストロの城』の冒頭シーン、カジノを襲撃して車にあふれんばかりの札束を詰め込んだルパンと次元が笑いが止まらなかったように、僕たちはバカ笑いしながら深夜のベンチエラフリーウェイを突っ走った。

ステーションワゴン車いっばいのアメリカ玩具買い付けに成功した僕たちはその夜、祝杯に酔いしれた。

……となるとカッコいいんだけど、現実はそのなにごく甘くない。深夜営業のジャック・イン・ザ・ボックスなるハンバーガーチェーンで、見たこともないほど巨大なチーズバーガーとチョコシエークで乾杯し、ホテルに戻った。

もう深夜だ。フロントはすでに明かりが消えていた。玄関のベルを押すと、パジャマ姿(可愛い帽子がへんに似合っていた)の不機嫌な主人がドアを開けてくれた。車から荷物を運び込み、部屋いっばいに、なだれのように広がるフィギュアを見ながら、途方にくれた。

こんなにかさばる物を、手荷物として飛行機には持ち込めない。

「よっしゃ」と武田さんは決意した。「中身を出して、箱はばらそう」

「え？ そんなことしたら、売り物になるか？」「大丈夫や。きれいにばらして、もっかい組めるようにするー」

プリスターパックのホッチキス針を慎重にはずし、透明パーツ・台紙・フィギュアの三つにわかる。紙がやぶれても、透明パーツが折れてもいけない。日本人は、隅っこが折れたポスターは買わない民族なのだ。

内職は明け方まで続き、よつやくむき身フィギュアと紙の束、透明パーツの束が完成した。買い込んだ本や雑貨、丸めたポスター類といっしょに、考えられる限りの密度でスーツケースに詰め込んだ。

しかし、買い込んだフィギュアの半分以上はまだ床の上だ。

「とりあえず、持って帰るのはサンプルや。これで通信販売の広告写真が撮れる。残りは発送するしかないな」

発送？ どうやって？

発送するための段ボール箱やガムテープはどこで買えばいいのか？ だいたい、どこに持っていけば海外小包が送れるのか？ ネット情報で便利になった今から思うと不思議だろけれど、当時の僕たちにはなにもかもわからないことだらけだった。

というわけで徹夜明けの午前六時、船便で送るための段ボール箱を調達に、ハリウッド大通りをうろついた。

まず「ダンボール箱」という英語がわからない。身振り・手振りでも伝えようとしても、わかってもらえない。さまざま歩いて二時間、おとつい行った手品専門店の前に大量のダンボール箱を発見、気前よく分けてもらえた。ろくな商品がないと、「昨日、日本語でさんざん悪口を言ったことをちょっと反省しながら、ホテルに戻って荷造りを済ませ、チェックアウトした。

イエローページで見つけた郵便局では「インボイスを書け」と言われた。はじめて聞く言葉だ。「すべての商品の名前と購入価格を、この紙に書け」と用紙を渡された。

僕たちは呆然とした。

商品ももう箱の中だ。開封して中身の確認をしている暇などない。飛行機の間はせまっている。格安チケットだからキャンセルも変更もきかない。一所懸命、思い出しながら書いていたが、やっぱり無理がある。とにかく早く帰らなければフィギュアの名前を書き、値段は「ドル」にして送ってしまった。

文句を言われるとしたら、日本の関税だろう。その時は、飛行機の間を気にせず、ゆっくゆっくでも釈明でも書類の書き直しでもしてやるよ。もちろん、日本語でー！

たった三日間のアメリカ滞在も無事に終わった。大阪の店に帰ってきた僕たちを迎えてくれたのは、期待いっばいに待ち受けるスタッフたちだ。スーツケースをあけると次々と出てくる、見たこともないおもちゃ。取り出すたびに大歓声があがる。

「洋書版のスターログで紹介されているのを見たことありますよー」「スピナー？　こんなのミニカーになってたんだあー」「何、このキャラ？　スターウォーズにこんなの出たっけ？」「宇宙酒場で端っこにいたヤツじゃない？」「ああ、そんな気がするー」「僕これ絶対に見ます。先に売って下さいー」「僕はこっちとこっちをー」

大騒ぎの中、狭い店内は、あつと言つ間におもちゃであふれてしまった。

トイギリスの大量のおもちゃの山から、ティースプーン一杯分のおもちゃをすくってきただけ。それが日本に戻ると、実はそのティースプーンがシヨベルカーのバケットくらい大きかったと気づかされた。そんな気分だ。

三週間後に、船便が届いた。

どうやって展示しようか悩むほどの量だ。どれもこれも大人気になりそう、売り切れ間違いない。錬金術とは、まさにこのことである。いや、浮かれてはいられない。気持ちを落ち着けて、雑誌広告の準備だ。

広告を出すには、売値を決めなければならぬ。いったい、いくらで売ったらいいのだろうか？

仕入れ値は、全部で約三十万円。

それに、安売り航空券代と宿泊費、船便代。おおざっぱに計算すると、仕入三十万円、出張費三十万円だ。つまり、買った値段の少なくとも倍で売らないと損をする。四ドルで買ったら八ドル。二十ドルで買ったら四十ドル。

いや、ちよつと待て。

アメリカ出張費だけじゃない。今回の広告は1／2ページで三十万円。普段は1／4ページで十七万なので差額の十三万円は今回の経費として計上すべきだ。広告の面積が増えるとデザイン会社に支払うギャラも増える。販売当日にはバイトも雇わなくちゃいけない。おおざっぱに計算しても、合計で三十万は経費として加算するしかない。

いやいや、ちよつと待て。

ひとつ残らず売れたらいいだろう。でもひとつでも売れ残ったら赤字になる。

確かに売れると思って買ったおもちゃばかりだ。それでも、売れ残るものもあるだろう。

いったいいくらで売ればいいのだろうか？　ホワイトボードに計算式を書いてみた。

売り値合計の2／3＝仕入れ値三十万円＋出張費三十万円＋経費三十万円。売り値合計は百二十五万円になった。つまり、元値の四倍で売らねばいけない。四ドルで買ったおもちゃは十六ドルになる。

それまで「絶対に売れますー」とか「僕も買うー」とか浮かれていたスタッフの熱も「ちよつと高いですね」と一気に冷めた。洋書屋で原価五ドルの本が千五百円で売られているのを見て「ポロポロ儲けしやがって」と毒づいていた僕たち。なんて無知な子供だったんだらう。

このオモチャ、いったいいくらで売るのが「正しい」のか？　儲ける、っていったい何なんだらうか？

結局、一律四倍は無理とあきらめた。一律ではなく、自分の欲しいものは、思い切って高値を付ける。

たとえばブレードランナーのミニカー・セットは原価の10倍にした。売れ残ったら自分で買い取ればいい。自分でも欲しいと思える価格、それしか基準が見つけれなかったのだ。

原価の倍から五倍まで、価格帯はバラバラになった。こんな値段でちっとも売れなかったらどうしよう？不安の中、発売日はやってきた。

フタをあけたら不安は一瞬で吹っ飛んでしまった。とにかく、売れる。十倍の値段をつけたブレードランナーのミニカーも開店五分で売り切れた。写真でしか見たことがないオモチャを前にして客は大興奮。値札なんか誰も気にしていない。五千円持っている人は五千円、二万円持っている人は二万円。財布の中すべてをはたいて買っていく。

そうか、みんな本当に欲しかったんだ。買ってきて、売らせてもらってよかったなあ。

ようやくと自分たちのやったこと、商品セレクトや価格設定、アメリカまで仕入れに行くという判断自体も「これでいいんだ」と思えた瞬間だった。アメリカ買い付け旅行は、僕たちに実に様々な体験をさせてくれた。

オモチャ屋が見つからず、アテもなく車を走らせた。

ものすごい量のオモチャにめまいがして、こんなに買い付けして売れ残ったら、と不安になった。

早朝のハリウッドを荷造り段ボール箱を探して、ホームレスと間違われた。

スタッフと一緒に大喜びして、値段が高すぎないかと不安になった。

いろんな思いを飲み込んだ一週間が過ぎて、売り上げ合計が出た。

しめて百二十万円。仕入れ値や経費をさっ引いて、三十万円ほどの利益が残ったことになる。

「岡田君、三十万円という事は……」「もう一回アメリカに行きますねー」

……この二回目の仕入れで記録的な赤字を出したのは、また別の話である。

街を歩いていてビルを見上げると、イヤな気分になる。

ちっぽけな貧しビルから超高層ビルまで全部、誰か他人のものだ。電車に乗って日本中どこへ行こうとビルはある。田舎でも三階建てのビルだらけは建っている。飛行機で世界中どこに行っても、無限にビルはある。

なのに、そのうちの一本たりとも「僕のビル」じゃない。これが実に、僕を落ち着かなく、イヤな気分にする。

どんなに働いて稼いでも無限にあるビルの、ほんのひと部屋を買おうとすらできない。成功してセレブと呼ばれてもワンフロアを買う程度だろう。僕がこの連載で、「ま、金ならあるし」と大人買いして楽しんでるのは、子供の頃欲しかったオモチャやハンバーガーだ。たしかに子供の頃、欲しかったモノも今なら買えるだろう。

でも、超ベストセラーを毎年出したとしても、お気に入りの高層ビルを十本買ってみたいとはならない。ビルはあんなにたくさんあるけど、絶対に僕のモノにはならない。この「絶対」の部分で、どうしてもイヤなのだ。特別に独占欲が強いわけじゃない。

「漁港でサンマが大量に水揚げされた」というニュースを見ても、イヤな気分にはならない。大量のサンマは独占できない。みんなが買って食べてしまうと考えても、別に気にならない。ケーキ工場の取材番組で、大量のケーキをみててもイヤな気分にはならない。

サンマもケーキも、食べたいと思えば、いつでも食べられる。ぼくだけじゃない。誰でも買える。でも東京だけで何十万本のビルが建っていて、その一本一本が誰かのモノなのもかわからず、一本たりとも僕ものじゃない。

僕の親戚のものでも、友達のものでも、知り合いのものでもない。僕たちは、いつも他人の持ち物に囲まれて、生きる場を借りて生活しているのだ。すぐ才能があつて成功するか、勝ち組とか負け組とか言われても、大したことではない。自分の成功は誰かの儲けになり、誰かがそいつのビルをまた増やすだけ。僕たちにはお余りでボーナスが支払われ、ローンを払ったり子供を大学に行かせたりする。

この世界のほとんどが「僕たち以外の誰か」のものだ。どんなに大成功しても、ビル十本買つことすらできない。何かへんだ。騙されている気がする。

高校生の頃から、この疑問が頭に取りついて離れない。

この世にはたくさんビルがある。そのビルはすべて誰かの持ち物。ビルを持っている人はごく少数。

誰でも知っていることだろう。でもみんな、本当に納得してるんだろうか？ 違和感を感じないんだろうか？ はっきり言って、騙されている気がしないのだろうか？

僕はときどき、まじめに働いて、税金を払って、このシステムの中で頑張ること自体に、疑問を感じてしまう。

頑張れば頑張るほど、僕らが生まれる前からビルを独占し、勝手にルールを決めた「悪の側」に加担し手助けしてる気がする。頑張つて勉強して一流大学に入り、一流企業に就職し、税金も年金も払う。

そんなことをするより、このシステムを壊す方が、はるかに経済性が高いのではないか？ もちろん社会不安による損失はあるだろうけど、ビルを持たざるものにとっては利益のほつが大きいんじゃないだろうか？

僕みだいに政治的にはボンクラ以前の人間でも、こんなことを考えてしまう。ニュースで社会不安を訴えられても「世情不安で損するのは」ビルを

持つてる人、でしょ？ 僕たち、ビルを持ってない人、には失つモノなんてないよ」と思ってしまう。  
平和な現状より、革命でも起きた方が経済的には得。  
そんな恐ろしい考えが心をよぎるから、僕はビルを見上げないようにしている。

たほど遠くない昔。僕は心の底から、取材、という言葉を憧れていた。経費、接待、という言葉を。なんせ売れないもの書き商売。取材も自分の金と時間を使つのが当たり前だ。そんな頃、さへももさんの旅行エッセイを見たら、頭から血が噴き出しそうになった。

「おくらさん、世界中で行きたいところ、どこでも行ってください。それを本にして出版しましょ」

持ちかけたのはマガジンハウスというお金持ち出版社。さへさんは世界中を旅して、とても面白い旅行エッセイとして発売された。

売れっ子はいいなあ。僕は心の中で、いや、嘘をつくのはやめよう。はっきりの口に出して、誰彼かまわず叫んだ。

ちくしょー、うらやましい！ 出版社の金で旅行！ 出版社の金で食事！

タダでさえマンガやアニメが売れてるのに、そのうえ旅行や食事までお腹じゃないんですか。そうですか、お金というのは、持っている人のところにますます集まるんですよ。と、ひねくれて星を見上げる僕だったわけだ。

ところが、そんな僕にもチャンスが回ってきた。ハリウッドでゴジラが映画化された時の話だ。当時、洋画が日本で封切りされるまでかなりの時差があった。そこでグアム島まで見に行つて日本の週刊誌に感想を書く。もちろん旅費も滞在費もすべて出版社持ち。担当編集者がひとり、コーディネーターとして同行してくれる、という。

やった！ 僕もついに、さへももさんの売れっ子になったんだ！

タダの旅行！ タダのご飯！

見に行く映画がハリウッド版ゴジラというのも素敵だ。USA版ゴジラのデザインも内容も極秘のベールに完全に包まれていた時代だ。なんとしてみひと足先に見たい！ 試写状もらしい邦題の映画評論家たちより先に見れる、というのもなんだか優越感をくすべられた。

吉祥寺の喫茶ルノアールまで来た雑誌編集者はなんだかくたびれたオジサンだった。だけど、僕にはルノアールの薄暗い天井のそのまた回こつに、グアム島の真っ青な空が見えるので気にしなかった。

打合せは、見苦しいまでに経費を使いたがる僕と、メ切りの確認ばかりするオジサンの会話が噛み合わず、なかなか進まない。

「ゴジラのフィギュア、買ってもらいますよね？」 写真撮って掲載したら経費になりますよね？」 「映画の内容紹介六割、旅行記四割ぐらいの配分で書くといいわ」 「ステーキの美味しい店、ガイドブックで調べました。それも旅行記というところで」 「概要は帰りの空港からFAXできます。文章は中日でお願ひします」 「僕、シーフード苦手なんですよね。でもアイスクリームは大好きです」 「週刊誌ですから、入稿から二日でグラフが出来ます」

オジサンのメモを見ると、日付と便名、原稿の文字数とかの数字だらけ。僕のメモには「行きたいお店」「食べたいご馳走」など、見るからに知能指数の低い単語ばかりが並んでいる。

さすがに不安になったのか、編集者は確認を求めた。

「岡田センセイ、スケジュールの方は大丈夫ですよ？」「はい！ もちろんグアム島はじめてですから、思い切つて一週間空けました！」 胸を張って答える僕を相手は制した。

「じゃ、二十四時間で結構です。行って、即ゴジラを見て、そのまま帰ります」

しまひせロ泊二日。(続)

「メ切りに余裕がありません。成田を土曜の夜に出たらグアム島には夜明け前に着きます。そのまま映画館に直行して、見たら空港にとんぼ返り。日曜の夕方には日本に帰れます」

吉祥寺・南口のルノアールで編集者は事もなげに言い放った。

「帰りの機内で映画評に取りかかっていたら、月曜の朝までには入稿してください。夕方にはケラが出ますのでバイク便で送ります」  
僕は目を白黒させた。

……前からの続きで申し訳ない。これは今から十年ほど前の話だ。ハリウッドで「ジラ」が映画化された頃、経費とか奢りという言葉が大好きな、そんな小金に汚い僕は「日本公開まで数ヶ月の時差があるUS版「ジラ」をグアム島まで取材で見にいきませんか？」という仕事を受けてしまった。

さくらのもごさんの旅行エッセイを読んで、「出版社の金で海外旅行ができるなんてうらやましい」と妬んでいた僕は大喜びで引き受けた。超ハードなスケジュールとは知らず……。

「そ、そんなの無理ですよー」

「いえ、可能ですよ」と数字だらけのメモを見せられた。日付・便名・映画館の公開時間・レンタカーの手配番号、すべてに抜かりがない。

「せっかくグアムまで経費で行くんです。お互いに無駄なく動きましょー」

編集者はニヤリと笑った。「ジラよりも鋭く、狡猾な牙が光った。

一方的なペースで打合せは終わり、その週末、僕はグアム行き機上に行った。深夜便なので真っ暗な機内、思わず悩んでしまった。

アコガシの取材旅行のはず。ま、金ならあるし、という状態のはず。

……でも、この余裕のなさというか、貧乏くさはなんだろう？ バラエティー番組で若手芸人がやらされてる罰ゲームみたいじゃないか。

いきなり機内に灯りがついて、あっといつ間に着陸だ。入国ゲートを抜けると、さすがの僕もテンションが上がってきた。はじめてのグアム旅行！さて、まずどこに行こうか？ 二十四時間営業のステーキハウス、ガイドブックにあったっけ？ しかし、同行の編集者は出国ゲート前のベンチに寝ころび、いきなり寝支度を始める。

「岡田センセイも今のうちに寝ないかと、あつがしんじですよ」「え？ 市内にいかないの？」「まだ夜中の四時ですよ。レンタカー屋も空いてません」たしかに同じ便で来た乗客もみんなベンチで寝ている。でも、楽しみにしていたグアムでの食事は……？

「これでご自由に」 二十ドル札を渡すと編集者は本当に寝てしまった。悔しいから僕はハンバーガー屋を探して、一番高いチーズバーガーとチリナチョスと特大コーラを飲んでやった。全部で六ドル、七百円だ。

やった！ さすが経費使い放題……

日が昇り、レンタカーを借りて市内に向かう。映画館にまっすぐ向かって、広大な駐車場に車を止めて、これまたまっすぐチケット売り場に並んで、そのまま「ジラ」を見た。

いや、忘れるところだった。ホットドッグとポップコーンと特大ファンタオレンジを買ってもらいました。もちろん経費で。

映画が終わったら、これまたまっすぐに空港に戻り、出国手続きを済ませて、ほんの少しだけ時間があつたので、朝と同じバーガースタンドで、またもやチリナチョスとパイナップルバーガーと特大コーラを経費で奢っていただきました。



帰りの機内は新婚カップルと不倫旅行カップルだらけ。イチヤイチャする小声やささやき声の中に埋もれて、僕は小さいテーブルでゴジラ観劇記と旅行記を書いた。隣に座った中年男の編集者から催促されながら。

若かった。なにも知らなかった。どこの世界に、見返りを期待しない接待があるだろうか？ 領収書精算のない取材など、あるはずがない。

きくと、さくらさんだって出版社に出してもらった金以上の労力を、その本に注ぎ込まされたはずだ。他の仕事に追われて、書き下ろしエッセイという儲からない仕事を途中で断りたくなっても、取材に連れて行ってもらったからにはもう逃げられない。

僕だってそうだ。せっかくのグアム島旅行なのに、思い出といえは空港のバーガースタンドと、ただっぴろい映画館駐車場と、ばかでかいイグアナがニューヨークで暴れる映画だけだ。

「こんなしんどい思いをするんだったら、自腹で行けば良かった」 帰りの機中、僕はずっと呪文のようにつぶやき続けた。

ただより高いモノはない。言われ古した格言だ。でも、格言のありがたさを思い知る時というのは、だいたい遅すぎて意味ないんだよな。とほほ。

なにかに熱中している若者は、いつの時代も貧乏と相場が決まっている。アイドルのおっかけにはまっているヤツは、夜行バスや激安航空券情報にやたら詳しくなる。劇団に所属して熱心に活動しているヤツは、短期日払の割高バイト情報にやたら詳しくなる。

「多分に漏れず、僕も大学時代、若さゆえの情熱のせいでイヤになるほどの貧乏を経験した。」

当時、僕が熱中していたのはSFだ。SF小説に熱中したってたかが知れている。バイトで稼いだお金は全部SF小説を買うのにつき込む。そんなことは僕にとって「当たり前」で、苦勞とも貧乏とも思わなかった。

ところが、僕が熱中していたのはSF小説だけでなく「SF」という活動すべてだった。SF映画やSFアニメ、そしてなによりSFファン活動。そのファン活動の頂点として僕たちの上に君臨していたのが「SF大会」だ。

「SF大会」とは、年に一度開催される「SFファンの、SFファンによる、SFファンのための」イベントだ。日本各地のSFファンたちが立候補し、毎年夏に持ち回りで開催する。SF作家の先生方もゲストできてくれるが、基本的には学生を中心としたボランティアだけで自主的に運営する、というところは学祭に似ている。しかし学祭と違って会場を借りなければいけないし、そのために入場料もとるので、動くお金は見たことも無いほどの金額になる。イベントのレポートがSF専門誌に掲載されたりもして、華やかだ。

大阪の片隅でそんなレポートを読むしかなかった僕にとって、心からあこがれるイベントだったのだ。

当時、熱烈SFファンだった僕は、SF小説を読みまくったせいで浪人し、それでも懲りずに読みまくり、関西で一、二を争う偏差値の低い大学にSFサークル入会を目当てに潜り込んだ。

勢いこんだ僕は入学式の翌日、SF研究会に入会し、木曜には「やたら熱い一年生が入会してきた」と先輩たちをビビらせ、その週の土曜には関西中の大学SF研究会の連合組織・関西SF研究会連盟、通称「関S連」の大集会に出席していた。

大集会といっても梅田の喫茶店でイケてない文系大学生が集まってクリームソーダとかカルピス飲んでSF論を交わしているだけである。そこにいきなり登場した、やたら生意気な一年生が「関西のSFファンの力を結集して、大阪でSF大会を開催しましょう」とぶちあげたわけだ。他大学の先輩たちは、一年坊主がいきなりやってきて、場違いなほど熱苦しく語り倒すのを、おきれ返って見守るばかりだった。

「反対されなかったのを良いことに、僕はさっそく唯一のSF専門雑誌『SFマガジン』の読者欄に告知を出した。」

「来年一九七九年は大阪でSF大会を開きます！ 申し込みは大阪府堺市中百舌鳥町〜岡田まで！」

二カ月遅れて、その告知はSFマガジンに掲載された。するといきなり、大学SF研OBから呼び出された。

「お前ら、なんちゅうことをしてかしてくれたんや！ とにかく東京へ行って謝ってこい！」  
東京ではBNFの方々が激怒しながら僕たちを待ちかまえているという。

BNF？ ビッグ・ネーム・ファン、つまり業界内で有名な影響力の強いファンのことだ。

有名なのにファン？ それはなんだ？

首をかしげながら、僕たちは夜行バスに飛び乗り東京へと向かった。

待ちかまえる大説教が、僕たちを超貧乏に叩き込むとは知らずに。

「SF大会、名古屋で決まったよ」

東京の大物SFファンはそつ言い放った。「困るなあ。SF業界の慣例を知らない者にひっかき廻されちゃあ」

大会の開催地はSFファングループ連合会議という組織で討議され、開催地を選定するという。そんな情報どこにも書いてなかったけど、それくらいは、伝統あるサークルに属していれば、知っていて当然の常識だそつだ。

「もう会場まで押さえたの？ 困った人たちだなあ。とりあえず小さいイベントでもやりなさい。それが成功したら喜んであげよう」  
肩を落として大阪へ帰った僕たちを待っていたのは、SF研OBたちの猛烈なお説教だった。後輩のしつけもできないのか、と東京ファンから散々、イヤミを言われたらしい。

この一連の屈辱や復讐心が僕たちに火をつけた。

小さいイベントでもやってみよう？ ようし、やってみよう！ 本家のSF大会よりも面白いイベントにしてみよう！

翌月のSFマガジンに僕は謝罪告知を出し、同時に「大阪でSFショーを開催します！」と宣言した。開催日は名古屋SF大会の一週間前。戦いのゴングは鳴った。

……と書く格好いいが、現実は厳しかった。

まず参加者が集まらない。ひと夏に二回のSFイベントは多すぎる。しかも名古屋SF大会の一週間前だ。

内容もアピールに乏しかった。SF大会は公認イベントだから安心感もある。有名なSF作家も大勢参加する。どちらか一方に参加するなら、誰もがSF大会にするだろう。

それにしても、七百名収容の会場で参加者たった百四十名は予想外だった。舞台から見下ろすと、ほとんどが空席。本当にガラガラという印象だ。

負け惜しみを言わせてもらうと、内容的には健闘したと思う。参加者からの評判も上々だった。名古屋SF大会が例年と変わらぬマンネリプログラムで不評だった分、業界内で僕たちの地位は上がった。

しかし、それ以上に僕たちには膨大な赤字が残された。

八十万円。学生にとっては笑い事ですまない金額だ。僕は親に頭を下げ、借金を申し込んだ。返済方法は実行委員会メンバーで話し合い、ひとり十万円と決めた。

とはいえ、みんなにとってSFファン活動は単なる趣味だ。十万円なんて大金、払いたくないに決まっている。現実問題として、返さなくても誰も困らないのだ。僕以外は。結果、実際に返してくれたのは二人だけ。残りはすべて言い出しっぺの僕が丸一年、ガードマンのバイトで支払った。

そして一年後、復讐の時は来た。

大赤字のSFショーはひとつだけ遺産を残してくれた。「あいつら、やるじゃないか」という業界での評価だ。

僕たちは来年度日本SF大会の開催権を勝ち取り、「八一年は大阪SF大会 DAICON IIIで」とごちあげた。

二年前、あれほど苦勞した参加者集めも、SF大会、という公式イベントだと思っけないほど簡単だ。定員千二百人はあっという間に埋まり、来る日も来る日も、我が家の郵便ポストには定額小為替が束になって届いた。

参加費六千円×千二百人＝七百二十万円。これだけの予算があれば、なんでもできる！ 浮かれきってる僕たちに、なんとも甘美な提案が持ち上

がった。

「せっかくだから、SF大会のオープニングアニメを作ろうよ」  
天国と地獄が、同時にはじまった。

若干八丁の若者たちが手にしたSF大会予算は、なんと総額七十万円！よっしゃ。これだけあれば何でもできる！赤字とはおさらばだ！  
ていうか、むしろ使い切るなんて、無理じゃない？ わはははは！

資金の豊かさに目はくらみ、これまでの学生らしい金銭感覚は一変した。

会場費七十万円？ 安い！ 本番二日プラス、リハーサル含めて三日間押さえてまえーそれでもたった二百十万円だ。

プログラムブックも、これまでの四Pや八Pのペラペラしたのはカット悪い。全四十八ページいってみよう。

使っても使っても、予算は使い切れず、ガレージキットやオリジナルグッズも、たくさん制作した。それでも無駄遣いはビター文していない。フェルトマスコットは、実家の刺繍工場から夜中に生地を盗みだし、プリントごっこで印刷し、女子スタッフたちに縫わせた。男子は、ガレージキットを手流して作らせた。

と、お金には困らないイベント運営をやっていたある日、スタッフのひとり「大阪芸術大学におもしろい学生がいる」と言い出した。「赤井というヤツは、コーヒ一杯おごると、かわいい女の子をいくらでも描く。庵野というヤツは、トースト一枚で戦車やロボットをいくらでも描く」

それはいい。何か描かせれば、プログラムブックも豪華になるだろう。

「毎日十杯でも二十杯でもコーヒ飲ませてやる。腹いっぱいトースト食わせてやると引張ってこい」と、軽い気持ちで、スカウトに行かせた。ほどなく、興奮気味のスタッフから電話だ。

「庵野って奴、すごいです！ トースト食いながら、ダイエーの計算用紙に複雑きわまりないロボットをすごいスピードで描くんです。パラパラめくると、ちゃんと動いてるんです！」

後にエヴァンゲリオンをつくる天才・庵野秀明と僕たちとの出会いだった。彼と赤井孝美、オマケとしてくっついてきた山賀博之の三人と僕たちは、五分間の八ミリアニメをSF大会のオープニング映像にすることに決めた。

たった五分でも、アニメを作るのは大変だ。スタッフは大学のSF研からいくらでも呼べるので、まず彼らに作業するための広い場所が必要だ。仕方ないので、僕の家を使った。結婚して家を出た姉の部屋を半年以上、常設スタジオとして占拠した。隣の僕の部屋は、スタッフの寝部屋になった。

紙や鉛筆といった文房具は値段もたかが知れている。しかしアニメはそれだけではできない。セルという透明のプラスチック板に専用の絵具で色を塗らなければならない。専用セルも売っているけど、すごく高い。僕たちは南大阪の工業団地まで買い出しに行き、ばかどかい透明塩ビ板を買って必要サイズにカットし、事務用の二つ穴パンチで穴をあけた。本物の三つ穴よりガタるけど、手作りセルの完成だ。

絵の具も東京から専用塗料を取り寄せた。ダイエーで組み立て鋼材を買って、手作り撮影台も作った。大量のフィルムに現像費、テスト撮影にもスタッフ教育のため失敗したセル塗りにも、どれも金がかかる。塗りムラや色ミスがひどくて、まるまるやりなおしなど当たり前だった。

姉の部屋だけでは手狭になって、僕は両親に頼み込んで小さな工場のワンフロアを借りた。フロア一面に作画機や塗装機、画材が並ぶさまは壮観だった。家賃こそタダだったが、気がつくくと、金はガンガン出ていった。

一九八〇年から八一年の夏まで、僕たちはSF大会のことしか考えていなかった。

本場アメリカのSF作家から日本SF大会へのお祝いメッセージをもらってくる。いまや地方TV局でもやってくるような、なんでもない映像を撮るために、ポストンで開催された世界SF大会に参加した。ネットもメールもない時代、海外のSF大会に参加するだけでも大変なのに、アポなしでSF作家や彼のエージェントに交渉し、当時重さ十キロもあったビデオカメラを廻した。録画するのはこれまた十キロの携帯型ビデオデッキだ。

もちろん、取材の渡航費用や滞在費はすべて自分持ちだ。どんなにSF大会の予算が潤沢になろうと、自分たちの打合せ費用や移動費など電車賃に至るまで絶対に大会予算には手をつけなかった。

だから、安心してSF大会の企画に予算をじゃぶじゃぶ使った。ディズニー映画『ファンタジア』の上映をはじめとする二日間で七十種以上のイベントも準備した。

最初は不可能に思えたオープニングアニメも、徐々にカタチが見えてきた。

八十一年の春、ついに最初のフィルムが現像所からあがってきた。

部屋のカーテンを閉め切り、八ミリ映写機のモーター音がけたたましく響き、ハロゲンランプが眩しく輝く。もちろん映写スクリーンなんかはない。ただの白壁にカウントダウンマーカーが映り、あわててピントを調整する。

写った！ 主役の女の子だ。彼女が振り向き、髪をなびかせて笑顔を見せる。

そこでフィルムは終了、たった一・五秒だけの映像だった。

一・五秒で充分。男女の区別なく、僕たちは完全にその女の子と恋に落ち、アニメ作りに魅せられていた。

何度も一・五秒の映画を見て、彼女の笑顔、その振り返りの演技、髪のなびきの自然さや膨らみを称えた。

この女の子は俺たちが作ったんだ！ このアニメは世界にたまたひとつ、俺たちが作ったアニメなんだ！

酒なんか一滴もなく、人間は酔える。一晩じゅう僕たちは語り合い、来ていない仲間を呼び出して、また一・五秒の試写会を繰り返した。

翌日から、さらにアニメ作りはヒートアップした。赤井の描く女の子や庵野の描くメカは作画用紙に鉛筆線で描かれている。これを透明セルにペン描きで写す。トレスという作業だ。

数十人のスタッフはまず全員、トレスの試験を受ける。優秀な数名がトレス係に任命されて、残りはセル塗りだ。

塗ったセルは数時間、乾かさなければならぬ。数十人が作業するため、乾かすセル枚数も膨大になる。段ボールでセル乾燥棚を作り、やがて百畳敷きの工場フロアは、完全にアニメ工房に変身した。

東京から取り寄せたセル塗料の瓶やセルの本体。惜しげもなく使われる作画用紙に塗装筆やセロテープ、ガムテープなどの消耗品。スケジュール進行を張り出すための模造紙やマジックインク。フィルムは一カット三秒でいど撮影するたびに現像に出し、試写して気に入らない部分があるところカットは全部やり直し、リテイクした。深夜のテスト上映で、アニメの女の子は走り、跳び、戦い、そして微笑んだ。メカは爆発し、ミサイルは乱舞した。

永遠に続くかと思われた僕たちの夏。しかしその裏では、無尽蔵に見えた大会予算が底を尽きかけていた。

大会当日の話は本題ではない。思い切ってはしよう。『第二十回日本SF大会DAICONⅢ』は大成功だった。オーブニングアニメは、空前の熱狂と大歓声に迎えられ、他の企画も大好評だった。超過しつつあった予算さえ考えなければ、人生最高の二日間だった。

SF大会のメは打ち上げパーティーだ。スタッフたちは二日間、企画も見せず、あこがれの作家に声もかけられず、ひたすら働いた。その労をねぎらい、同時にゲスト作家の先生たちへのお礼の場でもある。喫茶店で会議を開いてもお茶代は自分持ち、という態度を買ってきた僕たちは、始めて大会の経費で飲み食いをした。赤字がまた増えると考えるところが詰まりそうになるので、考えないようにしながら。

そんな時、次年度東京SF大会の実行委員たちが話しかけてきた。彼らこそ、かつて僕たちからSF大会を取り上げた東京の、有名SFファンだ。「一流ファングループでない君たちにしては、よくやったじゃん」

誉めてるつもりだろうか。怒りで首筋まで熱くなるのを押さえた。

「君たちが盛り上げてくれたから、来年の東京大会、大成功だよ」「SF作家のみなさんも、百名以上参加してくださいよ」

僕たちの大会は、ゲスト作家は十数名だった。SF作家の大半は東京に住んでいる。わざわざ一泊二日で大阪に来てもらうのは大変なのだ。東京だと時間もお金もかからない。そりゃ大勢、来てくれるだろう。別に彼らがすごいからではない。

それなのに、いかにも自分たちの手柄のような顔。でも、参加者にはそんなこと関係ない。参加するファンたちの目的は、第一に自分が好きな作家と会って話すことだ。自分の好きな作家が来るかどうかが参加の基準になる。

オーブニングアニメまで作ってようやく手が届いた、千二百名参加のSF大会、という記録。これをあっさり抜かれてしまうのだろうか。僕たちの悔しさに流した涙、それを跳ね返すための踏ん張り、そのすべては、彼らの言いつとおり来年の東京SF大会の踏み台にされてしまう。

呆然とする僕の耳に、彼らの言葉が聞こえてきた。

「こっちは舞台監督もいるし、照明のプロもいるんだ。もっと、マトモな舞台が作れるよ」

そうだろう。学生の集まりにすぎない僕たちは、最後まで舞台の取り回しに苦労した。プロの照明マンはけっして素人の演出プランどおりにやってくれない。そんな苦労も、コネや人脈の多い彼らには関係ないのだろう。

「コスプレも派手だったけど、ちょっとチャチだったね」

毎年のSF大会のように、参加者の自主性がせなら良いコスプレが集まるかわからない。だからスタッフみんなで手の込んだ衣装を作った。一般参加者には、すごいものができるように、何度も手紙でアドバイスをした。僕自身、四国や岡山まで行って、励ましたりコツを伝授したりした。

「こっちのスタッフには、プロの特殊効果マンもいるし、特殊メイクの本職もいるからね。もっと、マトモなものができるはずだよ」

確かに米良くんの『ロビー・ザ・ロボット』は紙と木でできている。近くで見ると張りぼてだ。マトモじゃないだろう。でも、舞台ではホンモノそっくりに見えたじゃないか！彼は、生まれて初めてあんな大きな着ぐるみを、何度も失敗して何週間も徹夜して作り上げた。大会当日の盛り上げのために、重くて暑いロボット衣装を着て、何時間も会場を歩いてくれたんだ。

しかし、彼らの指摘はすべて事実だった。どれほど努力したか、ではない。どれだけ素晴らしいモノが提供できたか、がすべてだ。僕たちの舞台が中途半端だったのも、コスプレがチャチだったのも事実だ。そして来年の東京SF大会は、僕たちの成功をあっという間に乗り越えてしまうだろう、というところも事実だった。

「そうだ、俺たちもアニメ作ろうよ」

え？ 思わず耳を疑った。

「こっちのスタッフにプロダクション勤めてる奴、いくらでもいるしね。そこでオープニングアニメ作らせよう」

そりゃ毎週30分のアニメを作っているプロのスタジオなら、5分のアニメくらい、すぐできちゃうかもしれない。

僕たちが二年間、すべてを捧げてきたSF大会やオープニングアニメ。それも来年には、記録、も、記憶、も塗り替えられ、過去のものになってしまつんだらうか。

言いたいだけ言って、次年度SF大会スタッフは去った。大盛況のうちに終了して、ハッピーエンドとなるはずだった僕たちの青春物語。エンドタイトルが出るはずだった打ち上げパーティーで、僕はひとり青ざめていた。周囲には苦楽を共にした仲間たちが、何も知らずに乾杯を繰り返していた。しかし、僕が、僕たちが本当にパニックになったのは、二日後の決算の時、二年前のSFショーとは比べものにならない大赤字が決定したときだった。来年の東京SF大会？ そんなもん、どうでもええ！ 今月末、金がないんだ!!



目標は、赤字は出さないけど、予算は使い切る。だった。試算では十万円くらい黒字のはず。しかし大会当日が近づくとつれ、予想外の出費が増える。会場では設備費以外に保険料もかかる。ゲームや文具は倍近く用意しないと機能しない。ゲスト呼び出しスタッフにインカム（携帯無線機）が必要。スタッフ用弁当の数が予想より多い。などなど、キリがない。

アニメにも予想外のお金がかかった。素人集団だから失敗も多い、つまり資材にムダが出る。撮影が失敗するとフィルム代や現像費も倍かかる。撮影用のライトもつけっぱなしで、家の電気代が一月二十万を超えた時、さすがに両親に怒鳴られ弁償させられた。

正直な話、赤字は覚悟していた。問題は、どれくらいの赤字か、だ。まず出費。予想より80万円も多い。

しかし、これ以上に凄かったのが売り上げ不足だ。大会参加者千二百人のうち、なんと二百名近くが参加費を払っていなかった。ゲストの作家さんや出版関係者、その家族や友人・取り巻きみたいな人たちが、いわゆる顔パスで入場したのだ。参加費六千円×二百人で百二十万円。予想外の出費と売り上げ不足で赤字合計は二百万円となった。大会グッズは評判も良く売り切れになったので、利益が三十万ほど出た。それでも百七十万のマイナスだ。SFショーの時、たった八十万円の赤字でも、あんなに大変な思いをしたのだ。百七十万円を学生たちがバイトで返すのは不可能だ。

梅田の喫茶店で僕たちは頭を抱えた。アニメを売ろう。

もうそれしか手はない。なにも一般売りするわけじゃない。SF専門誌に告知を出して「今年のSF大会は大赤字を出してしまいました。助けを求めてみなさん寄付をお願いします」と土下座すれば、カンパに応じてくれるんじゃないか？ そろそろ考えただけだった。

深刻な会議の雰囲気は一変した。なんかいけそうな気がする。でも、たった五分のアニメをビデオにダビングして、はたしていくらで売ればいいんだ？ 千円？ 二千円？

常識的な金額だ。たしかにそんな値段ならひんじゅくも買わないし、カンパと笑って許してもらえるだろう。でも、百七十万の赤字解決にはならない。僕は思いきった金額を提案した。

一万二千円。

全員、引きつった。たちまち、猛反対の嵐だ。しかし引き下がるわけにはいかない。喫茶店の紙ナプキンを裏返し、ボールペンで試算を殴り書きした。

- 一本二千円で売った場合……テープ代千円、ダビング費無料だから利益は千円。赤字回収まで千七百本売ること。
- 一本一万二千円で売った場合……利益は一万千円。赤字回収は百六十本程度で可能。

「SF大会参加者は千二百人です。買ってくれるのは、あのアニメを見た人だけ。つまり売り上げは最大千二百本しかあり得ないのです」僕は数字を示しながら説明した。「映像特典をつけて、一万二千円で売りましょう」

「でも」とSF研の先輩たちが反論した。「俺たちの評判は最悪になるぞ」「がめつい大阪人がエグい商売してる、と言われるぞ」

もったくさんだった。SFショーでも実際にバイトして金を返したのは、僕を含めて二人きりだったくせに。手を汚さずに口だけを出すな！

「じゃあ他にどんな手があるんですか？ ありませんよー」

「DAICONⅢの赤字埋めのため、オープニングアニメ（五分）を売ります特典映像あり。VHS二万三千元、ベータ一万二千元。お申込は赤字救済委員会まで」

SF専門誌に告知を出したものの、僕は心配でしかたなかった。たまたま五分の、素人が作ったアニメが一万円以上どう考えても無理がある。だから一分程度のおまけアニメを作った。解散したアニメスタッフをもう一度集めて、終わったはずの夏が過ぎても、またアニメを作ったのだ。完成したフィルムをビデオにテレシネして、次に相性の良いビデオデッキを探した。ビデオテープのダビングはもちろん手作業だ。そんなに注文も来るはずないので、自宅のデッキを二台、繋げてやるつもりだった。しかし、一万円以上取る商品なんだから妥協はいけない。とりあえずビデオデッキを持つてるスタッフは一度僕の家でデッキを預けて、ダビングの相性を診断することになった。結果、最高の組み合わせが選ばれ、その夜からダビング作業を開始した。

それにしても、もう何百回このアニメを見ただろうか。大会当日、打ち上げ、スタッフの慰労会、テレシネ起こし、と限りなく見たはずだ。でも僕たちは深夜のダビング作業中、ビデオにラベルテープを貼る手を休めて、アニメに魅入った。セリフひとつない五分の映像はいつ見ても見飽きなかった。

一九八一年の秋、『うる星やつら』のTVアニメがはじまり、『機動戦士ガンダム』の劇場版が公開されていた。アニメブームと言われた時代だ。俺たちの作ったアニメも、ガンダムに負けてない！ そう信じて僕たちはダビングとラベル貼りを繰り返した。雑誌の告知は、応募して二カ月以上たつて、ようやくと掲載された。

はたして申し込みは来るのか？ 支払いを待ってもらう限界はとつにすぎ、子供の頃からお年玉を貯めた僕の貯金も底を尽き、いろいろな方面に借借書を書いて、ついにサラ金に手を出しかけた直前、郵便箱に三通、封筒が入っていた。もちろん宛名は「DAICONⅢ赤字救済委員会様」。

携帯電話なんか、まさにSFだった時代だ。僕は封筒をひつつかんで、南海高野線〜国鉄環状線〜近鉄と乗り継いで、近畿大学前喫茶店の二階へ駆け込んだ。

「売れました！ 三本ですー」

開封したうちの一通は、二万五千元の定額小為替といっしょに、ベータとVHSの各一本を申し込んでいた。合計で四本、売れたわけだ。アイスコーヒーやカルピスで乾杯し、自宅に帰ったらさらに二通、遅便で届いていた。

翌日は十通、その翌日は十二通。週末までに合計五十通で、五十三本の売り上げ。

翌週はさらにペースが上がった。週の前半で合計八十七本。ついに売り上げは百万を超えた。しかし週末には配達途絶え、土曜には一通の申し込みもなかった。僕たちも「そこまで甘くないか」と苦笑いした。

二週目の月曜、いきなり五十通以上届いた。翌火曜にも三十通。水曜、ついに売り上げは二百本・二百四十万円を超え、赤字問題は胡散霧消してしまった。

しかし現金入りの郵便は止まらない。第二週目の週末、二百本を超えた。ここで一時、勢いは衰えたけど、オープニングアニメが紹介されたアニメ専門誌が発売された。念のため、そこにも赤字救済委員会の告知を載せていた。

また毎日、数十通の現金封筒が届きだした。

五百万、六百万。連日僕は定額小為替を現金化し、現金書留を開封し続けた。

最終的に、DAICONⅢオープニングアニメは六百本以上を売った。合計で七百万は超えていたはずだ。赤字分と利息を払ったあと、余ってしまった四百万円以上の札束。これ、いったいどうすればいいんだろう？ 楽しいような、ちょっと怖いような薄笑いで、僕たちは顔を見合わせた。

オープニングアニメは、予想以上に売れまくった。合計で売り上げは七百万円以上。SFファンやアニメファンたちは、赤字を見るに見かねてではなく、作品を見たくて、たった五分のアニメに、一百万円以上のお金を送ってくれた。自分たちが作ったアニメが、そんな見たこともない大金を生み出すほどの価値があるんだ！

「赤字救済」という本来の目的なら、二百通を超えた段階で受付を終了し、返金するべきだったかもしれない。でも正直、僕たちは舞い上がっていた。それまでずっとSF活動にお小遣いやバイト代のすべてを持ち出して使い果たしていた僕たちだ。苦勞してイベントを成功させて、それでも赤字に終わってバイトに追われていた僕たちなのだ。そこに天から降ったような七百万。うれしくて天狗になってしまった僕たちを、誰が責められようか。みんな、一百万円以上出しても僕たちのアニメが見たいの？ しょうがないなあ。本当はもう発売終了しなくちゃいけないんだけど、売ってあげるよ。感想やファンレター、いっしょにアニメを作りたいという手紙もいっぱい来た。そのすべてに僕たちは目を通し、発売終了の話はウヤムヤに消え、毎日ビデオのダビングは続いた。

僕のも、友達のビデオデッキも、摩耗したフーリーや録画ヘッドや消磁ヘッドを何度も交換し、やがてアルミケースはあけっぱなしでガタガタになっても、ダビングを続けた。当時の日本で、こんなに使い込まれたビデオデッキはなかったらう。

点検に来たソニーの技術者がサジを投げ、心斎橋のソニービルに持ち込んで修理を依頼したときに「家庭用デッキで摩耗したのは研究所にも例がない。詳しい使用データを教えてくれ」と頼まれたのを、「とりあえずダビングが溜まっているからさっさと修理しろ」と蹴飛ばしたくらいだ。

二台目のビデオデッキに買い直してダビングを続け、僕たちのアニメは売れに売れ、最終的に赤字を埋めて純利益は五百万を超えたらうか。ここまでの大金を手にして、さすがにうるたえた。ネコババ・山分けしていい種類の金ではない。打ち上げパーティーで消えてしまうような金額でもない。どうしたらいいんだらう？

あるスタッフが気弱に言った。

「SF大会が生み出したお金だから、来年のSF大会に寄付したらいいんじゃないですか？」  
ちょっと待て。

今度のSF大会は東京だぞ。「大阪の連中、ちょっと評判良かったからって、いい気になってる。オシたちが本当のSF大会を見せてやろうじゃないか」と言ってるような奴らだ。

この数年、SF大会は低調で参加者も減少気味だった。僕たちががんばって盛り上げたからこそ、来年の東京大会・二千人の定員があつというまに埋まったのだ。資金も余りたおして、一年半も前から事務所を借りているらしい。金の使い方の知らないバカどもだ。

おまけにSF大会打ち上げ会場で僕に言ったセリフ！

絶対に忘れはしない。そんな奴らに五百万円、くれてやるって？

死んでもイヤだ！ それなら、自分たちできちんと使う方がいい。

来年の東京SF大会の、その次の年、一九八三年日本SF大会に我々DAICONIVが立候補する！

僕たちの宣言に、日本中のSFファンが震撼した。SF大会の立候補者として、前年のSF大会、すなわち東京SF大会で参加者の投票で誘致が決定する。

勝負は八二年の夏。戦いのゴングは鳴った。もう戻れない。  
大丈夫、ま、金ならあるし！

一九八二年八月一日深夜、SF大会合宿場の一室で、次回SF大会の開催調整が関係者だけで行なわれた。部屋に入りきらない男たちと、もつもと立ちこめるタバコの煙が廊下にまで溢れていた。

「では来年の大会は大阪で。武田さん、岡田さん、おまかせします」

拍手を受ける僕たちは、神妙な表情を作っていた。半年近く、あつかましいほど繰り広げた「八三年SF大会は大阪に」「八二年星雲賞はダイコン・オーブニングアニメに」のキャンペーンは見事にあたった。翌日の舞台で僕たちはSF界最高賞の星雲賞を受賞し、来年度開催権を手に大阪に帰ることになる。誘致の宣伝に作った『愛国戦隊大日本』の上映も大成功だった。

しかし、まだまだ予算は余っている。おまけに僕たちが目指したのは、空前絶後のSF大会だ。四千名の参加者は全員合宿制、参加費も一万五千円。つまり大会総予算は六千万円となる。

これだけの予算を、わずか二日のSF大会で使い切るには、いったいどんな企画が必要だろうか？

まず思いついたのが、豪華客船を借り切った、海の上のSF大会だ。船という完全に閉ざされた空間を借り切れば、中の演出が思いのまま。D A I C O N 星系へ向かう宇宙船という設定にすれば、参加者は新惑星への入植者、スタッフは宇宙船乗組員。すぐおもしろいイベントになりそうだ！

しかし参加者四千名が全員乗れる船を探すのに難航した。まだピースポーツもない時代だ。チャーター船の情報を探すにも、電話帳で該当しそうな先に片っ端から問い合わせるしかない。大阪に寄港する最大級フェリー『さんふらわあ』を有する関西汽船には僕が直談判した。しかし旅客人数は五百人程度。圧倒的に足りない。

「チャーターできませんか？車やトラックを入れる甲板に、畳と布団をずらっとひいて四千人、詰め込みます」  
担当者が鼻で笑った。

「チャーター費、払ってくれるんやったら考えまっせ。二日で四十八時間、まあ二千万かな。学生さんやし取引実績はないんやから、前金になりまっせ」  
「二千万、来週に振り込めます」

僕たちの即答に、さすがに相手も真顔になった。

ところが、問題点がいくつも出てきた。まず先方は警備会社を入れてくれと言っ。船舶クルーだけでは学生中心の行儀の悪そうな客が、一晩中酔って騒ぐのが不安だと言っのだ。

内装を宇宙船っぽく、というのも問題だった。非常時の安全確保のため、通路には一切なにもできない。塗装もシール貼りもダメ。船室の飾り付けも、あらかじめ機装パーツをこつちで作るにしても、船に換装するのに一日では不可能だ。けっきょく、四日間九十六時間も借りることになる。

参加者の食事は保健所の衛生検査を通すため、指定業者の仕出し弁当か、船内のスナック売店のみ。手間と費用がうなぎのぼりに増えていった。

決定的だったのは、貸切しても港に二日間泊めっぱなしにはできない、という予想外の規制だ。客船は運輸省(当時)の管轄、ホテルではないから泊めるだけ、はできない。大阪港を出発して湾を一周し、また港に戻るのでもかまわないが、どうしても航海しないとダメらしい。ところが船が動いてしまうと、遅れて来た人が参加することができなくなる。特に多忙なSF作家などゲストは、仕事の都合で遅れてくることも多い。それでも参加してもらえないのはありがたいことなのだ。「夜の時は参加できません」となるといつ対応ができるはずもなく。

チャーターしても客船は思い通りにならない。『世界初！豪華客船を借り切って海の上でSF大会』という企画を泣く泣くあきらめた。しかし、金の使い道はいくらでも思いつく。次に僕たちが燃えたのは『大阪フィルハーモニーを雇ってSF音楽を演奏させよう』という企画だった。

大阪フィルハーモニー交響楽団、通称「大フィル」。

この超名門楽団に、SF映画や特撮・アニメーションを演奏してもらおう。なんと贅沢でかっこいい企画だろう！

SF作家の小松左京先生に相談すると、NHKの音楽プロデューサーを紹介してくれた。僕たちのような素人が直に大フィル相手に交渉するより、音楽プロデューサーを通じてやりたいことを伝えた方がいい。小松先生にはそんな思惑があったようだ。

さっそく会いに行き、「大フィルを雇うにはいくらくらいかかるか」と聞くと、逆に何名編成にしたいのか、と問い返された。

「普通は何人ですか」「七十名以上だとフルオーケストラと呼ぶね。それ以下はセミオーケストラ。テレビのBGMだと、セミですませることも多いよ。大フィルは最大で百三十名まで可能だよ。でもコンサートでそんな規模のもの、めったにない。年末の第九コンサートくらいじゃない？」

迷わず「じゃあ、一番高いので！」と指定した。ま、金ならあるし。

NHKのプロデューサーは驚いたようだったが反対はしなかった。

「君たちが企画してお金を払うんだから、君たちの好きなようにしていいんだよ」と笑った。

そのあと、指揮者は誰にするか、バイオリンは何人がいいか、細かいことを聞かれ、ついに「おまかせします」と頭を下げた。しかし、問題は演奏曲だった。僕たちは数週間前からはりきって、曲の候補をリストアップしていた。スターウォーズやゴジラ、ウルトラセブンなど、SF大会の参加者なら誰でも知っている曲で、交響曲で聞きたいものばかりだ。30曲以上の長いリストになった。ところが、プロデューサーはこのリストを完全に無視した。

「曲名じゃなくて、コンサートのイメージを教えてください。そしたら、ぴったりの楽曲をこつちがセレクトションしてあげるから」「イメージはSFです」「ならホルストの『惑星』とかいいんじゃないかな」「クラシックはいいですね。ウルトラマンとかスターウォーズをやって欲しいんです」「せっかくなフル編成なんだから、ふさわしい曲を演奏じゃないともったいないです」

違う！ 僕たちは素晴らしいオーケストラの演奏を聞きたいんじゃない。みんな、SF音楽を聴きたいんです！  
怒鳴りそつになるのを抑えながら、僕は必死に訴えた。

「じゃあ俺はもう知らん！ 君たちで譜面探してきてよ」「譜面？」「楽器各パートごとの楽譜だよ。自分で曲を選ぶと言っただけには、譜面くらい探せるんだろー！」

そんなこと言われても、オーケストラ用の楽譜がどこに売っているのかすらわからない。今のように、ネットで検索すれば、何でも注文できる時代ではないのだ。

それでも後には引けない。「探します！ 見つかったら演奏してもらえますよねー」と啖呵を切ってしまった。

まず、大阪中のレコード店や楽器店をまわる。有名なクラシックの楽譜なら売っている店でも、映画音楽やTVの曲はほとんど扱っていない。探し回った末、心齋橋のミヤコレコードでスターウォーズの譜面を見つけたときは本当にうれしかった。

しかし、どうしても『ウルトラセブンのテーマ』がない。金があっても譜面がなければコンサートは不可能だ。

どうかな？



空前の予算で企画を進めていた『第二十二回日本SF大会DAICONⅢ』。そのクライマックスにふさわしい企画、大阪フィルハーモニーによるSF音楽の夕べは問題続出した。

僕が大好きな『ウルトラセブンのテーマ』、これはどうしてもはずせない。フルオーケストラ編成ので聞けたらどんなにすばらしいだろうか。しかし、いくら探してもオーケストラ用譜面など見つからない。すっかりヘソを曲げてしまったNHKプロデューサーに聞いても無視されるだけ。困り果てた僕は日音に相談した。ゼネラルプロダクツで企画するウルトラシリーズのグズ・模型の商品化窓口が、赤坂見附の日音だったからだ。日音。いかにも音楽に関係してそんな社名ではないか。

藁をもすがる思いで担当・内藤さんに電話をしてみると、NHKのプロデューサーが言ったことは本当だと教えてくれた。TVの特撮ものの曲は、予算も低いので、30〜40名程度の楽団編成で演奏されている。130名編成の譜面はこの世に存在しない。

「でも」と内藤さんは明るい声で言った。「任せて下さい、岡田さん。日音はそっちが本業なんですよー」なんとウルトラセブンの作曲家・冬木透氏に連絡して、百二十名編成用に編曲を頼んでくれた。今までは、編成を減らしてくれという注文しか受けたことがなかった冬木氏は大喜びで仕事を受けてくれた。

というわけで、なんとか希望曲の譜面が集まった。まさか本当に譜面を調達してくれるとは思わなかったのだろう。プロデューサーがあきれた顔をしながらも、受け取ってくれた。

そして本番前日のリハーサル。

今まで聞いたこともないほど豪華なウルトラセブンのテーマや「ジラ」が聞ける。

僕は期待に胸ふくらませて会場に入った。

が、リハが始まったとたんに、愕然とした。

違っ！

全然違っ！

自分が知っているウルトラセブンと、ニュアンスが全然違うのだ。

「パ〜ンパ〜ン、パ〜ンパ〜ン、パ〜ンパ〜ン、パ〜ンパ〜ン」と始まるはずが、「プワ〜ン、プワポンポンポン」とすべく歯切れが悪い。颯爽としていない。

聞けたもんじゃない！

「違いますー！僕は思わず叫んでました。」そっじゃない。最初の音、もっとはつきり強く。ウルトラQはモノクロの国産初のSF本格ドラマ、続くウルトラマンは目の覚めるようなカラーの怪獣痛快ヒーロー譚。そしてこのウルトラセブンは、円谷プロが世界に向けて総力を挙げて問った、未来社会の侵略と防衛を描いた、テレビ番組史上類例のないSF超大作です。冬木徹のホルンの音は来るべき21世紀の予感なんです。わかりませんか？」

指揮者も演奏メンバーもぼか〜んとしていた。

しまった！

ここから、モーツァルトの楽曲解釈なら一晩中でも語れるくせに、ウルトラセブンに関しての知識は皆無なんだ！つまりオーケストラのプロでも、

SFの素人！  
ぶっぴんぽんぽん

本番前日、リハーサルではじめて、大阪フィルハーモニーにSF音楽を演奏させる企画の欠点が見えた。

クラシック業界では、演奏するときに、原曲の解釈が問題になる。だから一流の指揮者、一流の演奏者は「いったいモーツァルトはどんな心象風景で作曲したか?」「新世界アメリカから故郷ボヘミアへ、どんな想いを込めて、ドヴォルザークは『新世界より』を作曲したか?」と悩むのだ。譜面どおりに演奏するより、いかに曲を解釈し、表現するか。それが優れたプロの演奏だ。

ところが。大阪フィルハーモニーは気軽に受けたこの仕事の難易度を知らなかった。クラシックコンサートでも、まさか聴衆のひとりひとりが演奏する曲の全てを知ってるわけじゃない。大半は「ちょっと上品なお出かけ」と思っただけで来ているヌルい客層だ。

しかしSF大会の参加者は違つ。ゴジラにしてもスターウォーズにしても、楽譜の隅々まで、それどころか映画のシーンやジョン・ウィリアムズの指揮っぷりまで暗記している、音ひとつ狂ってもわかる。いわゆる猛者ツワモノばかりだ。いわば客席を埋め尽くすモーツァルトやドヴォルザーク本人の群れに向かって演奏しなければいけない。

しかも大フィルは肝心のSFについて、ウルトラセブンやゴジラについてなにも知らないから、楽曲解釈も自信なさげだ。最初はNHKプロデューサーが指揮者に自分のイメージを伝えていたけど、あんまり遠いからついつい僕が口を出すことになる。

「え〜と、ゴジラは原始のジャングルみたいなイメージで……」

「違います。最初は東京湾です。東京湾の底、日本人が忘れたはずの戦争の記憶から、ゴジラが姿を現すシーンです。この最初の和音で、観客をドキッとさせなきゃダメです」僕の声はリハーサル会場に響いた。

「続いで小節はゴジラの足音です。体重数万トンの巨大生物がかちどき橋を押し倒し、銀座の街を歩いて行く。その足音です」

「ゴジラって昔の恐竜じゃないの?」

「違います! ゴジラは人類の悪行そのもの、戦争がイメージなんです。もうすっかり戦争を忘れて繁栄する東京に、巨大な怪物が上陸する。核兵器で全身が醜いケロイド火傷で覆われた巨大生物が、贖罪を求めて来るんです。まるで東京大空襲を再現するかのよう、見渡す限り火の海になる。人間の原罪をゴジラは問い詰めに上陸するんです。もっと神話的イメージをお願いします」

オタクに好きなことをしゃべらせてはいけない。僕は夢中になって楽曲解釈を語り、楽団員たちは呆れ果てた。

問題のウルトラセブンのリハに入ると、僕の指摘はさらに細かくなった。

「曲の入り、そのラッパの人たちが揃ってない。もっと強くできませんか?」と指までさした。「ああ、ホルンね」と横でプロデューサーが小さな声で訂正する。気がつく、僕は指揮者の後ろに仁王立ちして直接、楽団員にリテークを出していた。

「あんまり練習すると、かえって疲れて本番でうまくできないから」といつプロデューサーの意見にも聞く耳もたず、リハは四時間ぶっ続けで行なわれた。

大阪フィルハーモニーを雇ったためのウン百万円が高かったかどつが、それはわからない。でも、演奏させられた楽団メンバーの日給が割りに合わなかったことだけは確かだろう。

さて次回、忘れていた? ようやくと表題「究極」ビジネスの話だ。

八三年六月、早すぎる猛暑の正午。大阪城にま近い三階建ての薄汚れたビル・縫製会館の屋上では、半裸の学生たちが寝汚く転がっている。唯一の日陰、給水塔の裏で経理担当の龍谷大・田中君から打ち明けられた。

「足りない？ 六千万あったのに？」「足りないというか、いま赤字か黒字かわかんない。それが問題なんです」「おい、そりゃないだろ」「四千人のイベントで経理が僕だけ、というのがムチャなんですよ。もっと人を廻してください」「人って言われても……」「岡田さんたちが毎日、気まぐれで指示を出すからわからなくなるんです。たとえばコスプレ大会。事前の会議では予算五百円でしたよね？」「うん」「昨日見たら、もう経費十万以上使ってますよ。生地にスポンジ、リボンにアクリル板まで三メートルも買ってる！ 参加者の自主企画なのに、なんで生地を買う必要があるんですか？ そういえば岡田さん、先週の会議で『スターウォーズの酒場みたいに大量の宇宙人がうろつかなかちゃダメだ』って言ったそうですね？で、五十人分のコスチューム材料領収書が来たんです」

「あゝ、そっだっけ？」

とほけて逸らせた視線の向こう、真っ黒でガリガリに痩せた男が立っていた。近畿大学の米良君、舞台大道具のチーフだ。「三枝さんえをください。宇宙船が間に合いません」

すると、半裸で寝ていた小汚い男が飛び起きた。自称、日光浴ひかりあびしていたアニメ班監督の山賀だ。「三枝は無理です！ アニメができなくなりますー」

アニメ班と大道具班はどっちも手先の器用な人材を取り合って対立する。そこに田中君が割って入った。

「宇宙船講座も予算オーバーです」

「え？ ベニヤ代とペンキ代だけあれば大丈夫じゃなかったの、米良君？」

宇宙船講座は、巨大な宇宙船の立体模型をステージに登場させるといって、ハッタリの効いた企画だ。長さ十二メートルもあるディスプレイ号、直径六メートルのデススター、その他エンタープライズ号や宇宙戦艦ヤマトなどの巨大模型が順番に天井から舞台上に降りてくる。司会は宇宙船のまわりを歩きながら解説する。クライマックスは、宇宙船が一斉に降りてきて、ステージ上が歩けないほどぎっしりになる予定だった。

「宇宙船はベニヤとペンキで作れます。でも宇宙船を保管する場所がありません。幸い、月2万で車庫が借りました」

米良君は嬉しそうにいった。これで、幸い、月2万の予算オーバーだ。

「大道具も人が足りません」「え？ なんで？」「アニメ班にはクーラーあるけど、大道具つくってる倉庫は扇風機一台だけ。ペンキ臭いし仕事もキツイ。アニメ班から何人が回してください。特に三枝さんえ。あいつが来てくれたら、はかどるんですけど」

「三枝はアニメの要かなめです！ 渡せませんー」

山賀が大声で怒鳴り、いつの間にか庵野と赤井も隣でうなずいている。そこに思い詰めた顔で企画担当者・大阪大学の林君がやってきた。

「企画数が二百を超えました。最終的には三百近くになります。岡田さん、ぼくひとりですべての企画に責任を持つのは無理です」「そ、三百？」「予算も企画もスケジュールも、すでに学生の手に負えるスケールじゃない。」

いつの間にか日は暮れて、星が見えていた。六時間も炎天下に会議したわけだ。疲れ果てて屋上から降りると、次の、非常事態ひんじょうじたいが待っていた。

SF大会委員長・西垣君の実家は縫製工場を経営している。その「ネ」で四カ月間、百坪以上ある縫製会館という古ビルのワンフロアを格安で借り、アニメスタジオに改造した。エレベーターなどもちろんない。薄暗い階段を三階まで登り、ドアを開けたとたん目に入るのは二十人以上の美術系学生たち。画用紙に刷毛で水を塗っている。水引き技法で背景画を描いているのだ。

その奥では庵野秀明、貞本義行、前田真宏などという、いま考える信じられないようなメンバーがアニメ原画を描き、十人程度が動画に割っている。しかしフロア大半を占めるのは、そんな「才能」のない普通のスタッフたち。毎日スタジオに出勤して、単調なセルの色塗りや色トレスなど黙々と働く、大学SF研に所属する学生たちだ。

毎日、入れ替わり立ち替わりやってくる百人以上の学生たち。規模だけで言えば東京の一流アニメスタジオを凌駕するだろう。ボランティアという無料の人手をふんだんに使う僕たちのスタジオは、東京のファンたちから「タ」部屋」と呼ばれていた。しかし、無料なのは人件費だけだ。

「セル代と絵の具代も岡田さん、最初は無駄も多いけど、慣れると無駄は減るって言いましたよね。でも色塗りなんていう単調な仕事を朝から晩までさせられると、スタッフがすぐ逃げる。だから、いつまでたっても下手なまま。無駄が減らないです」

会計担当の田中に僕は責められた。

「じゃあ、一度来たスタッフは帰さないことだな。自分の替わりを見つかるか呼び出さないで帰れない、とか」

「それじゃ本物のタ」部屋ですよ」

田中は苦笑したけど、僕は真顔だ。あとで赤井に相談してみよう。

「演出の山賀も、二重、三重露光をやりたがるけど、失敗率が高いから、フィルムも現像費もオーバーです」

隣を見るといつの間にか山賀がいない。逃げやがったな。

「さて企画会議だ。林君、企画数が二百を超えて君ひとりでは把握できな」

企画担当・大阪大学の林はうなずく。

「大ホールと中ホール、それぞれ二日間ずつ。これは沢村さんが担当してくれたので大丈夫です。問題は自主企画、二十室ある会議室で五〜七企画が二日間。それぞれに担当はつけましたが、実戦経験のあるスタッフはアニメや大フィルムや合宿などに持っていかれたので、一年生が中心です。二百以上ある企画のほとんどが、当日になってみないと経費にいくらかかるかわかりませ」

林の報告に、田中は頭を抱えた。

「合宿も問題です。四千人を一カ所に泊めるホテルはなかったので、三軒の旅館を貸し切りしました。その一軒では、オールナイトで企画が五十本程度行なわれます。また公式パーティーとして難波の宴会場、味園を借りて六百規模の宴会を予定していますが、この予算も出ていません」

出版部の植田が当日パンフレットの話を出して、公認アイテム部からはガレージキットやTシャツ、マグカップの進行具合が報告される。そのたびに予算が増えて、会計担当の視線が痛い。

そうなのだ、現在の混乱や予算オーバー、その大半は僕の「あれもこれもやりた」」「あ、面白いアイデア浮かんだ」が元凶だ。

しかし恐ろしいのは予算オーバーじゃない。「いくら金がかかるかわからな」といつ予測が立たな」となるのだ。

「イザとなればまたアニメ売ればいい。と考えているんじゃないでしょ、ねっ」

「ま、まさか」

ギクリ。痛いところを突かれた！

『第二十二回日本SF大会DAICONIV』のテーマは「異世界感」。来るべき未来、人類が他の惑星系へ入植する「ある日」という設定だ。その二年前、僕はロスのデイスニーランドに行って打ちのめされた。日本にTDLができるずっと前のことだ。

「魔法の王国」という統一コンセプトでデザインされた園内すべての作り込みや配慮に、「ここまでやるのか」と感動し、同時に敗北感を味わった。DAICONIIIですごくいいことをやった。つもりでも、まだまだ追いつくところか背中すら見えない巨大なライバル。それがデイスニーランドだった。SF大会にテーマを設定し、それを徹底的に守ろうと企画した僕は、なんとかDAICONIVでデイスニーランドに追いつくのは無理にしても、その差を半分程度にしたい、と意気込んでいた。

「異世界感」、つまり、まるで他の世界にいるかのような感覚。どうすれば参加者に感じてもらえるのか？

面白いアニメや企画をするだけじゃダメだ。SF作家が何人来てサイン会をしても、まるで別世界のような感じ、なんてしないに決まっている。SF大会の当日だけ使える通貨を発行しよう。

これが僕の出した結論だ。海外旅行で一番「よその国に来たなあ」と実感するのは、円を換金して十ドル札とか二十五セント硬貨とかを手にしたときだ。参加者に「ここは別の星だ」と実感してもらうには、現地通貨への両替が一番効果的だ。

しかし、考えるのは簡単でも準備はとてつもなく大変だった。まず、オリジナルの紙幣と硬貨を作らなくてはいけない。種類も最低で三種は欲しい。通貨単位はSFでよく使われる「クレジット」。一クレジット＝百円として、十クレジット札と、一クレジット硬貨、それに五クレジット硬貨を作る。問題はそれぞれ何枚ずつ作るか、だ。

「多少高くついても、ちゃんとしたものを作りたいんだ。おもちゃや、ゲームセンターのコインに見えたら終わりだから。材質にも気を使わないと」  
「ポスター用の紙に刷ったりしちゃダメなことですよ。二日間だけとはいえ、ほんのお金として流通させるわけだし、カラーコピーされたら困りますしね。でも裏表、すらすらにコピーする奴はいないでしょうけど」「実際に偽造するヤツがでるかどうかが問題じゃないんだ。カラーコピーできそうだな、ちゃちいな、と思われたらもうダメなんだよ。紙質は日本の紙幣とおなじ、<sup>NOY</sup>楮三又が入ったヤツがいい。やぶれにくくて、折り目も復元しやすいんだ」「とりあえずサンプル取り寄せてみましょう。でも岡田さん、どれくらいの数、用意するんです？」「全員が換金できて、買い物できないうと意味ないしなあ。各売り場やディーラーに配るお釣りも必要だよ」「すごい流通量じゃないですか。予算はいくらくらい考えてるんです？」「百万か二百万？」「そんなわけないでしょー。一ヶ月前、参加者ひとり十枚ずつとしても四万枚。おつり用に店側にも同じくらい必要ですよ。八万枚のコイン、鑄造原価が単価四十円として、三百二十万円ですよ。五ヶ月前、硬貨がその半分として百六十万円。十ヶ月前もひとり十枚として四万枚でも、おつりはもっと必要ですよ。一百万で千円のもの買い物されたら、一ヶ月前に九枚返さなくちゃいけないから十枚は欲しい。特殊な紙に両面印刷して、精度の高い裁断かけるから、単価20円として、二百万円。締めて六百八十万円です」

会計の田中があわてて会議を止める。

「ちよ、ちよっと待ってくれ。どこにそんな金があるんだ？ アニメはすでに予算オーバー、企画は総予算の検討もつかない。舞台大道具にしても合宿にしても、もうどこにも廻せる金はなごぞー」

みんなが僕を見た。

しかたない。秘密兵器を出すか。



SF大会当日のみ使える通貨を発行する。思いつゝのは簡単だけど、調査すればこれがとんでもなく大変な企画だというのがわかってきた。「二種類の通貨を混在させたい」と僕が主張したためだ。

「日本円とクレジットを両替するだけなら、やっぱり遊びの域を出ない。クレジットの他に、もうひとつ、弱い通貨も作りたいなあ」「弱いとは？」  
「クレジットは百円だから、日本円より強いじゃない？ 逆に百ナントカでやっつと一円になるような通貨」「ああ、経済後進国の通貨ですね」「うん、参加者が移民するDARCON星系は新しい植民星だろ？ 政府が発行する公式通貨クレジットの他に、現地で流通する補助通貨があるというリアリティが出ると思う。江戸時代、幕府の発行してる大判・小判と、各藩が発行してる藩札みたいな関係で」  
補助貨幣はペペという単位に決まった。百ペペ一円という弱小通貨だ。

一クレジット＝百円＝一万ペペ、となる。

ペペは、言つまでもなく『ペリー・ロンドン』、あの「なんぼでも無限に出版されるSF小説」からとった。

SFファンなら誰でも知ってる『宇宙英雄ペリー・ロンドン』シリーズ。日本での翻訳出版はすでに三百六十冊を超え、本国ドイツでは二千五百巻を超えるというギネスにも認定された世界最長のシリーズだ。面白いことは面白いんだけど、とにかく数が多い。それをギャグにして、インフれ気味の安物通貨の単位にしてしまったわけ。

というわけで、発行する通貨と枚数は以下のように決まった。

- 十クレジット札(千円) 十万枚
- 五クレジット硬貨(五百円) 八万枚
- 一クレジット硬貨(百円) 四万枚
- 一万ペペ札(百円) 四万枚
- 五千ペペ札(五十円) 四万枚

紙幣の印刷費が二百万、特注硬貨の製造費が四百八十万円、しめて合計六百八十万円が必要だ。

「……こんな金、どこにあるんですか？」「無理です」「あきらめまじゅう」

みんなが「出て行く金額」ばかりを計算してるとき、僕は「流れる金額と溜まる金額」を考えていた。

「いや、大丈夫。これなら可能だ」

「？」

当日、参加するSFファンとは本棚にSF小説があふれてる人ばかり。つまり本質的にマニアであり「レクター」だ。参加するSF大会の名札やパンフレットも大事に持ち帰る。

ということは当然、このSF大会オリジナル通貨も一種類つつ持ち帰るに決まってる。発行通貨をぜんぶ足すと合計千七百五十円。四千人が両替せずに持ち帰ったら、我々の手元には七百万が残る。

「……岡田さん、これいつ考えついたんですか？」「いつか」「なぜ？」「めいりめたくなくからひ。この企画、絶対いやりたしもど」「……」  
それはみんなも同様だった。面白い企画で参加者たちをあとと驚かせたい。東京の連中が絶句するくらい、歴史に残るようなSF大会「をやりた

い。だから自腹で毎日スタジオに通ってアニメを作り、深夜まで会議するのだ。

「でも全員が持ち帰るとは限らないでしょ？」  
「二セット三セット持ち帰る奴もかなりいるはずだよ」  
「両替で混乱しませんか？」  
「紙幣と硬貨をセットにして二千円とか三千円のパックにすればいい」

ついに否定する材料はなくなり、クレジット企画は正式にスタートした。

その時に気づいてしまった。

「これは最終ビジネスだな」と。

一九八三年八月二〇日、ついに『第22回日本SF大会DAICONIV』は幕を開けた。

四千人の参加者は、オープニングアニメに熱狂し、舞台上に巨大な宇宙船セットを並べ歩きながら解説する、宇宙船講座、に驚きの声を上げた。「スチウム大会やSF作家を囲むお茶会、TRPGの実演会など、二日間徹夜で企画は進行した。

しかし来場者をもっとも驚かせたのは、オリジナル通貨「クレジット」だ。

参加者はパスポートを提示して日本円をクレジットに両替する。見慣れない紙幣と貨幣を手に、怪しげな土産物屋や同人誌売店を見回れば、いつの間にか全くの異境に投げ出された気分だ。

売り子たちはクレジット札での支払いは喜んで受け取る。現地通貨「ペ」は渋々と受けて、日本円は「お客さん、そんな金、使えませんが」と苦笑いする。新札ばかりだった十クレジット札はあつというまにクシャクシャに使い込まれ、分厚い五クレジット銀貨と一クレジット銅貨をお釣りに受け取ると、ずっしりポケットに重い。

そうか、ここは日本じゃないんだ。

日本でなく、地球でない、どこか別の世界。これこそDAICONIVが目指したテーマ、異世界感、だった。

泣く泣くあきらめた企画もある。

クレジットと「ペ」の兌換率を時間ごとに変えて、為替差益で損したり得たりできる、というゲームだ。当日、実際の換金を業務委託された第一勧銀が強く反対された。「いまやっていることだけで、法律スレスレです！ 為替差益とかやりだすと責任もてませんー！」いや、たしかにごもつともだ。

参加者たちはクレジットを使いこなした。つまり、通貨として信じさせることに成功した。結果、イベント終了後の集計で八万クレジット以上の持ち帰りが判明した。僕たちの手元には八百万円以上の「差益」が残ったのだ。

もちろん、印刷所やコイン製造業者、それに銀行に支払って、この金は右から左に消えたのは言うまでもない。

僕たちの長い夏休みは終わった。

八月末、縫製会館から機材を引き上げ引越した。いつもどおり肉体作業をサポートした僕は、屋上で見事な夕陽を眺めていた。

「僕たち、お金を売ったんですね」

会計担当の田中がつぶやいた。「参加者のみんな、あれをお金だと思ってくれた。だから千円札と十クレジット札を「両替」したと思った。でも十クレジット札って、なんですか？ 印刷費二十円の紙切れですよ」

「紙幣という名の「商品」は、誰も商品だと思っていない。みんな「お金」だと思っているからよ」

「こんなこと、許されるんですか？」

「僕たちも日本国から田中という「商品」を買っているよ。米国に旅行するときは「ドル」という商品を買って」

「……」

「通貨を作る、というのは最強最終ビジネスじゃないかな。みんな、それがただの「商品」だと思っただけじゃない。それがないと何も買えないから、生きていくためには自分たちの労働で「通貨」を買っただけじゃない。お金の本質を通貨そのもの、あの紙切れや「コイン」だと思っちゃって」

「違いますか？」

「お金の本質って、たぶん、参加と信仰、なんだよ。参加者はクレジットというゲームに参加した。いつの間にかあの紙切れをお金だと信仰した。だから記念に持ち帰ってくれたんだ」

「……なんか、また岡田さんに言いくるめられてる気がするなあ」

「僕たちは日本という国家に参加して、円という通貨が価値があると信仰している。だから円は通貨として存在できるだけなんだ。国家は、国民という消費者に通貨という商品売りつけて儲けている。最終ビジネスの勝者は、いつだって彼らなんだ」

「でも、僕らも通貨を作った」

「だから、国家を作るのと同じと簡単かもよ。そつだ、次の企画で……」

「やめてください。もう岡田さんの口車で苦勞するのは「リリ」です」

田中は笑って、階段を降りた。

気がつくつとすでに夜だ。大阪城を照らすライトが灯り、引越しの荷物搬出も一段落したようだ。

SF大会も終わり。長い夏も終わり。タバコ、吸えたら吸うところだし、酒が飲めたら飲むシーンだよな。ひとりで笑っていると、真っ暗な屋上で声をかけられた。

「岡田さん、もう気が済んだでしょう？ こんなこと、もうやめましょう」

オープニングアニメ監督の山賀だった。

次回『最終ビジネス編』、ついに最終回！

縫製会館ビルの屋上は、夜になれば街灯の光も届かず、真っ暗闇になる。彼方に見えるライトアップされた大阪城からの薄明かりだけが頼りだ。端正で彫りの深い山賀の顔も、なんとか目鼻の区別が着く程度。表情は読み取れない。

「追いつきましたか？」

「え？」

「目標だったんでしょ？ アメリカの世界SF大会。追いついたんですか？」

「追いついたよ。いや、追い抜いたかな。オープニングアニメにクレジット、いまやDARCONIVが世界いちのSF大会だ」

「満足しましたか？」

「満足は無理だよ。完璧な異世界感にはまだ遠い。まあ次の大会では……」

「次の大会？ いい加減にしてください。こんな遊び、もうやめましょう」

「遊びじゃないよ」

「遊びですよ、岡田さんにとっては。思いついたときに学生集めてSF大会やって、普段はセネプロでTシャツやマグカップ売って。やりたいときだけ映画やアニメ作って。それで岡田さんはいいだろうけど、俺や庵野はどうなります？ Tシャツの柄でも考えてほしいんですか？ たまに、岡田さんたちがまたSF大会をやる気になったら、またオープニングアニメ作ればいいんですか？」

感情を露わにしない山賀に詰め寄られて驚いた。同時に腹もたった。なんで僕だけ、ここまで言われなきゃいけないんだ？

「じゃあ、どうしたいんだよ」

「俺たちの相手は誰ですか？ 東京のSFファンですか？ 世界SF大会ですか？」

「SF大会が悪いのか？」

「オープニングアニメを作るとき、言いましたよね？ ルーカスやスピルバーグに勝てるって。彼らがライバルなんですよ？ 俺たち、まだ彼らには

勝ってないですよ」

「それは違つたら」

「違いますよ。SF大会の外側にも世界は広がってるんですよ。せめてルーカスやスピルバーグと同じ土俵で戦わせてください」

「ムチャ言つたよ」

「ムチャってなんですか？ 俺たちがアマチュアだから？ いつまでアマチュアですか？ アマチュアにしてはすごいね、と言われたいからですか？」  
痛いところを突かれた。その通りだ。僕たちがやったことは、たしかにアマチュアとしては最高だ。小さなお山の大将、子供たちのお山だ。

世界に通用するSF大会をやりたかったはずなのに、とっくの昔にそんなの追い越してしまった。オープニングアニメを見て、プロのアニメ業界も影響を受けつつあった。国家しかできないはずの通貨も流通させた。

僕たちは、こんなに簡単に「歴史」を動かした。世界とはいったい何だろう？ 個人力ではどうしようもないもの、動かせないのが「歴史」や「世界」じゃないのか？

「東京へ行きまじょう」

「東京？」

「プロになってアニメ作りまじょう。アマチュアなのですよ、と言われるのはもういいです」

「プロになる……」

「もうSF大会は終わったんです」

「いや、終わってない」

「え？」

「まだ異世界感は完璧じゃない。まだやり切っていない」

「なに言ってるんですか。もう……」

「アニメの話だよ。プロになっても、俺たちは同じだ。完璧な異世界感、やり残してるじゃないか」

「岡田さん……」

「テーマは、異世界感に決まったな。東京へ行く？ 違うよ、俺たちは世界に行くんだ」

後に『王立宇宙軍オネアミスの翼』と呼ばれるアニメ、異世界感をテーマにした企画はこの夜からはじまった。

数年後、僕と山賀の作った会社『ガイナックス』は日本アニメ界を席卷し、後に世界にその名を轟かすことになる。

しかし一カ月前に二十五才になったばかりの僕に、そんな未来がわかるはずもない。わかっているのは、僕たちの長い夏は始まったばかりだ、ということだけだ。